

C'/SCR  
ver.Passer

雀

の涙

Studio \*\*\*46



# 目次

## 雀の涙

- prologue -	3
◆1 死んだはずの少年	4
.....	7
.....	12
◆2 家族になる、とは	15
.....	19
.....	24
◆3 酒と女とスポットライト	27
.....	30
.....	36
◆4 本当の未練	39
.....	43
.....	47
◆5 燕雀は鴻鵠の志を	50
.....	55
.....	60
オマケ	
- epilogue - Passer For Me.	65



雀の涙



- prologue -

闇夜にかぼそく隠れる昏い雨雲。それが三年前に、鶇<sup>つぐみ</sup>の大事なものを奪っていった。貴族階級の住まう御所に生まれ、窮屈な姫の生活に異国の風を通していった金髪の少年。

今、鶇が辿り着いた古のカラクリ大蛇の胎内で。最早存在ごと消されてしまった少年が、微笑みながら一筋の涙を落した。

「俺は多分……あんたと一緒に、いたかったんだ」

同じ御所で暮らしていた頃、何度も笑顔で示された想い。ようやく言葉にした少年に、鶇は絞り出すように答える。

「それは……アナタの世界の私に……ちゃんと、伝えて」

この少年と、出会ってはいけなかった。わかっているがここまで来てしまった鶇は、全身全霊の真心で応える。

「……待っているから。どこにいても私は……アナタのこと」

ここは鶇の在る世ではない。留まることなどできはしない。それでも伝えたかった。人世の光と無縁の船底で、時の闇を渡る少年への「鶇」の想いを。

少年は、これまでの怜悧さが嘘のようにぎこちなく微笑む。

「それは……無理だよ」

そうしてとても幸せそうな声が、拙い希みを全て拒絶した。

「——だって……オレは——……」

永い約束の黒い翼が少年を包む。果てしない慟哭へやがて誘う——

Cx/SCR Ver.Passer: 『雀の涙』

-Sparrows eat Crow in that Drip to Rust-

2022.12.24

## ◆1 死んだはずの少年

雨が降るといつも鶴は、その少年のことを思い出した。

「……嘘。あれからもう三年？」

次の年末、鶴は十八歳の誕生日を迎える。

あの頃と何一つも変わらない御所——四季折々の花木を植える風流な邸宅で、遅い裳着を済ませる前に、雨の名を持つ彼に出会った。

脛の裏に浮かぶ、ここ「花の御所」に居候していた少年。

未だにお齒黒も拒否している鶴の、女らしいとは言えない短い赤い髪を、彼は何度もキレイだと言った。鶴がよく着る鶺鴒色の小袖と、静かな青を湛える黒い瞳によく合っていると。

——ツグミのは、ずっとキレイな赤だから。

彼は何故か、二つの顔を持っている異国人だった。普段は金色の髪に紫の目で、何かと勘は鋭いわりに、人間よりも弱いヒト型の化け物というおかしな出で立ち。

鶴の叔父が彼を一時期御所に預かっていたのは、そんな穏やかな少年が時として急に、銀色の髪に青い目の死神となるからだった。

——何で……殺さないの？

白い小袖に紫の袴を着せられた、金色の髪の少年。平和な笑顔がよく似合い、鶴の父に習う剣も力も弱小であるのに、彼は無情な銀色の髪へ変貌して戦うことが度々あった。

後に彼の妹という幼女が現れてからは、鶴には少しだけ、ヒト殺しを名乗る少年の哀しさが伝わり始めていた。

——兄さんは、優しいから、優しくなくなったの。

一人きりの自室の縁側から、しとしとと降る雨夜を眺める。このままきっと、自分は一生一人だ、とよく考えている。



「アイツら……雨がよく似合うバカだったっけ……」

鶯の父は、手酷く甘い。過保護と言っても差し支えない。とうに成人した鶯が縁談に見向きせずにいられるのは、父が全て門前払いしてくれるおかげだ。可愛がっていた弟子の少年が娘に近付くことすら、父は決して許さなかったのだ。

母は御所の、管理者である公家の実姉だ。父も御所を守る最上位の侍で、身分としては高い鶯なので、縁談の申し込みは後を絶たない。

「私のこと、キレイなんて言うの、アイツだけだろうけど」

障子の硝子に映った自分は、蓮っ葉な顔で暗く笑っている。会ったこともないのに婚姻を申し込んでくる輩に、鶯は全く興味を持ってない。つつい不快感が表に出てしまう。「アイツだって、はしたないって言ったくらいなんだし。私なんかのこと、本気で好く人なんていないんじゃない？」

鶯に誰か、好きな相手がいたわけではない。ツグミと一緒にいたい、なんて、無責任に笑える少年と未来を誓ったわけでもない。だからこそ、降り始めた雨に、問はずにはいられなかった。少年は何故、そんなことを願っていたのに、鶯を置いて妹のために死んでしまったのか、と。

家族にも友にも恵まれた鶯は、政略結婚など皆目御免だ。両親の面子を潰さないよう、お茶もお花も芸も嗜んできたが、本当は化け物の少年のように世界を旅して見てみたかった。

「いつだって、連れていけるって……言ってくせに……」

少年には異国の警備隊である養父母がいた。その養父母の敵対者が少年と妹を狙い、自宅に帰り妹を守っていた少年は帰らぬヒトとなってしまったのだ。

「……嘘吐き。また会いに来るって、笑って帰ったくせに」

そんな危ない事態になっているなら、少年を一人で家には帰さなかった。養父母が頼んだ護衛者はいたらしいが、妹を守る護衛者を更に守り、少年は剣を折られたと聞いた。

バカじゃないの。夜の雪見障子に映る鶯が口をつぐむ。

大切な者を守るためには、少年は銀色の髪の死神となり、敵と認めた相手を容赦なく殺した。自分以外の誰にも負担を分けようとせず、黙々と一人で敵を殺す化け物だった。

助けを求めればいい。鶯達は化け物の血が流れた人間で、古より忌まれる禁忌しじみの呪を扱う。だから彼の養父母も御所を頼って預けていったというのに。

少年の妹が帰るといふ、大きな事変の決着がついたために、油断した頃合いだった。本当の禍わざわいはそこからだったのに。

ずっと、一人で。

それを受け入れてしまったから、雨音と語らっていた鶯に——不意に、背後から返る声があった。

「……嘘じゃ、ないよ？」

……嘘、と。口の端がふっと上がりかけて、大きな寒気と共に、夜着の白い湯帷子<sup>ゆかた</sup>の全身が瞬時に固まった。

これは、嘘。また嘘ばかり。叫んでしまいたくなる程、そのかすれた声色は鶯の心臓を鷲掴みにした。

呪いの言霊を扱える術者の一人として、鶯には強い靈感がある。縁側を横目に、右肩を壁にして膝を抱え、背を向けていた床の間に何かが降りた。そこには多分、視てはいけないものがあることを、心霊の感覚が刺すように訴えてくる。

「……そん……な……——」

部屋中にばさりと、と翼の形の影が広がる。掛け軸の闇から抜け出たような人影が、甘いささやき声をこぼした。

「……久しぶり、ツグミ」

知らず、胸を両手で抑えて、鶯は早まっていく息を堪えた。

これは決して、振り返ってはいけない。鶯でなければ視ることのできない、人世に在ってはいけない霊障の類。常世が落とす影への返答は、わかりきっている禁則なのに——

「まさか……紫雨<sup>しぐれ</sup>……!？」

立ち上がって、床の間を見返すことに留まらず、名前まで口にする呪を施してしまった。霊的な相手を捉えて、存在を固定する軽拳を無意識に命じた、黒い瞳に映るものは。

「オレは、『時雨<sup>シグレ</sup>』だよ。……会いたかった……ツグミ」

そこには銀髪で、無情な死神とは真逆に微笑む黒衣の少年が、見慣れない黒い翼を広げていたのだった。

紫雨と時雨。金色の髪の子雨が初めて御所に現れた時、鶯は今と同じ違和感を持ったことを思い出した。

目前には銀色の髪の子雨。二つの顔と名を持っていた少年。しかし時雨の幼さはあの頃のまま、時雨なのに子雨のように笑っている。ただしそこに、絶えることのない冷気を載せて。

鶯が何かを尋ねる前に、時雨は黒い翼を消すと、再会の間など無視して鶯の肩を壁に押し付けてきた。

「——……！」

寒気の源の黒い翼と、何も言わずに笑う金色の眼が昔とは違う。

こんな風に強引に、鶯を覗き込む少年でもなかった。やがて笑みの消えた眼には、どんな鶯が映ったのだろう。

「シグレ……ずっと……」

思わず声が震えてしまった。常に結界を張るはずの御所で、この部屋だけが雨雲に侵されたかのように黒ずんでいく。

「ずっと……何処に行ってたの!？」

それはおかしい問いかげだ、と、自分でもよくわかった。見た目はともかく空気の変わり果てた少年が、この世のものではない死者だと鶯は知っているのだから。

けれど少年は、声の底に何を見たのだろう。元々お飾りのような呼吸を止めて、哀しみを隠すヒト殺しの顔を浮かべた。

「——……オレは……」

額が合わさりそうなほど、間近で見つめ続ける双眸。誰かにこうも近付いたのは、初めてだろうと鶯の顔が熱くなった。恥ずかしくなって咄嗟に視線をそらす。

鶯も彼も、思いを言葉にするのは苦手な性質だ。特に鶯は愛想がないので、気安く話しかけてくるのは身内か、人ならぬ異端の化生ばかり。その中でもこの少年はいつも、多くを言わない鶯をこそ心地よさげに隣に佇んでいた。

とても長い時間を、見つめられていた。鶇にはそんな気持ちだった。  
在ってはいけない時間の畏れ。相手の熱情が伝わる虞<sup>おそ</sup>れ。もうこの少年に、関われない現実を突き付けられる怖れ。絡み合う心が渦巻く嵐で、ますます口が閉じてしまう。

何かと隣に立とうとした少年。鶇への好意は昔からあからさまだった。それがこの夜、空いた左手で鶇の後ろ髪を掬い、そのまま頤<sup>おとが</sup>に這わせた細い指で、そらしていた顔を不躑に上向かせようとする。

「……もっとツグミのこと——……みせて……」

歳の差ができていたため、ほぼ同じ背丈の少年がここまで踏み込もうとしてくるのは。これがきっと、やっとの再会で最後の逢瀬なのだとわかる。

このまま、突然の雨に流されてしまえば。

少なくとも今だけは、叶わなかった想いを確かめ合うことができた。その渴きを感じた体が強張る。

けれど、再び目を合わせると、鶇に押し寄せる感情がひと息に噴き出してきた。  
あくまで何も語らない時雨を、気が付けば鶇は、力の限り押し返してはたいていた。

楡<sup>うつき</sup>紫雨は死んだ。それがこの街に登録された、異国の少年の籍の末路だ。髪の色が銀に変わった時に、時雨と呼び分けられていた少年も同じ話。

遺体を確認したのは父で、鶇は彼の最期を視てはいないが、「シグレ」という存在が途絶えてしまった事実は、自身で行った占いでわかっていた。

「どうして……シグレは、無理をするの」

占いとは決して、完全な回答を示すものではない。術者の靈感が強いほど、様々な今や未来の可能性を、細かく変えて引き当てることが多い。鶇の靈感は強い方なのに、それでも「シグレがいる」結果は表れないほど、強固に定まった運命だった。神童と呼ばれる従弟<sup>ゆうや</sup>の悠夜が、辛うじて遺体の行く末を探れた程度だ。

鶇に派手に引っ叩かれて、軽く離れた時雨は頬を押さえて笑っている。苦いともはにかみとも取れない色で。

「アナタはどうして——何をどうして、ここに来たの？」

初めに掛け軸の影から顕れた時に、彼の背に広がっていた黒い翼。本来なら穢れを禁ずる御所の床の間に、降りることはできないはずの悪意が宿った力。

けれどむしろ、少年はその翼故に、実体なき己を影だけで動かしているのを感じる。あの黒い翼がなければ、そもそも物陰から現れるという、非常に高度な空間転位の力を使える化け物ではない。

だから彼は、もしかすると鶯に会いに来るために、あんな悪意の翼を身に憑けたのだとしたら——

安らぎを捨てた、悪霊であるのか。とても問えずに、鶯が言葉に詰まった時、時雨は見たことのない軽さで笑った。

「違うよ。オレはツグミの感じる通り、ここには存在しないオレだから」

不自然に大人びて見える笑顔は、常に気を張っていたヒト殺しには合わない。

同時に少年の雰囲気が変わった。今まではまだ、鶯に触れるのをためらう影だったのに、まるで彼の根本が揺らぎ始めた。

「でもツグミが、オレを『時雨』だと本当にわかってしまうなら——オレはツグミを、連れていってしまえるんだ」

影だけであるなら、近づくことはできても物理的な接触はできない。霊は霊体であるから霊で、鶯の心神を侵すことはできても、体には指一本たりとも障れはしない。

そのはずであるのに、鶯が最初に、影である彼を「時雨」として場に留めた呪いの作用だろう。形を得た彼は、動けない鶯を異国の花嫁のように、つと正面から抱き上げたのだった。

「やっ……！」

足の付け根を持ち上げられて、不安定な宙で思わず時雨の首にしがみつく。間近になった眼には白い湯帷子で、真っ赤になった鶯が映っていた。

こうして見事に、自身に還ってきた呪い。己の過ちでの窮地だとわかる鶯は硬直してしまう。

連れていかれる。普段の鶯なら術でも何でも抵抗しただろうに、今夜は呪い返しのおかげで意識が集中できない。時雨を挟む両腕をむしろ強めてしまう。

くすり、と時雨が妖しく嬉しそうに微笑む。

「ツグミ……可愛い」

最初の体勢なら時雨の髪が、鶯の顔の下にあった。時雨はすりと片手を鶯の背から腕まで回し、ほぼ横抱きに変えると、今までで最大に体をぴたりと合わせた後に——

「——……！」

存在しない影であるはずなのに、しっとりとした柔らかな感触。甘くて冷たい唇が、確かにそっと重ねられた。

逃げようにも肩一つそらせないまま、彼の腕に指を突き立てるしかない。

強張った体と、湿っていく口唇は死に水のように。ねえ、鶯、拒まないの？ でないと——そう時雨が舌先で訴えてくる。

どうして。それだけを叫ぶ胸が舵を見失った。鵜という心が乱雲に呑まれる。  
こんな触れ合いを強行するのは、決してあの優しい少年ではない。ぎゅっと目を閉じ  
真っ暗になった視界で、やがて不意に、走馬灯のような思い出が浮かんだ。

この国の中心にある皇都、「京都」の管理要所地「花の御所」の一画で。  
質素な道場に、御所の侍の筆頭である父——<sup>やましなげんじ</sup>山科幻次と、剣を習いに通う金色の髪で  
尖った耳の少年がいた。

「ゲンジって……どうやったら倒せると思う？ ツグミ」

「……は？」

道場の雑巾がけが終わり、隣の釣殿で鯉を眺めていた少年に、お茶を持ってきた鵜は  
呆れた。父の弟子がよりによって、実の娘に打倒法をきくのだから。

本当に悩んでいる彼が不思議で、鵜は訊き返してみる。

「父上を倒してどうするのよ？ 紫雨」

「うーん……ゲンジは多分、少なくともそうしないと、オレのこと認めてくれないと思  
うんだ」

「父上はもう十分、紫雨のこと、買ってると思うけど？」

弱小さはともかく、父がたまに飲みにつれていく少年は、その気安さが傍から見ても  
微笑ましいと密かに評判だった。

ところが当の本人は、不穏な反逆を至って軽く口にする。

「ツグミの隣にいたかったら、いつかはゲンジを倒さなきゃいけないよな」

がちゃん、と派手に湯呑茶碗を揺らし、隣で鵜は引っくり返りかけた。

「もちろんそれだけじゃ駄目だけど……あれ、ツグミ？」

どうしたんだ？ と、両手で幸せそうにお茶を抱えて平和に笑った少年。その無害さ  
は、銀色の髪の少年も同じだった。

少年が自宅に帰り、妹を守って命を落とす前に。久しぶりにこの辺りに、雨が降って  
いた時節だった。

「……って——……えっ、時雨……!？」

白い雨を滴らせながら、御所の塀の裏に立っていた銀色の髪の少年。気付いた鵜は慌  
てて屋内へ引っ張り込んだ。

戦う時以外現れず、大体無言の銀色の髪の少年。板の間に座らせ濡れた体を拭きつつ、  
鵜は怒らずにいられなかった。

「もう、こんなにずぶ濡れでいきなりどうしたのよ!? 何か用事があれば、<sup>けい</sup>炯君づてに  
言ってくれば私から行くのに」

少年が銀色の髪となることは、生命力の消耗が激しいために、あまりさせてはいけないと少年の親戚から聴いていた。

それなのにどうして、雨の中を一人で御所にやってきたのか、わけがわからずわしゃわしゃと銀髪を逆立ててしまう。

「こら、逃げない！ まだ全然乾いてないでしょ！」

「.....——」

気が付けばじっと、手拭いの中から少年は見上げていた。

「.....時雨？」

「.....鶯に会いたかった」

——え？ と、やっと口を開いた彼を見つめる鶯に、常に無表情なヒト殺しは、ただ彼の心を伝える。

「俺は.....鶯に会いたかっただけ.....みたいだ」

その時少年は拙く微笑んでいた。自身の穏やかさには気が付かずに。

何も偽りのないまっすぐな思慕に、動揺した鶯は少年を激しく拭きながら丸め込んだ。  
「何言ってるのよ！ 来てもいいけど！ だからって雨の中来ないの、風邪ひくでしょ！

アナタは何でいつもそう——」

戦う以外何ひとつ、望みのなかったはずの銀色の髪の少年。有り得なかった余分な心は、鶯を道連れにするなんて想うべくもない。

だから鶯はどうして、と、三年後の今も問うのだ。



運命の針が振れた。

それは時雨の腕にいる鶇に、直接見えた光景ではない。おそらくは動揺で暴走した霊視で、時雨の足元の黒い影に、鶇はもう一つの「有り得ない」を見つけた。

「刃。『黒鍵』開錠・陽——完全5度・A<sup>フラット</sup> / 宮徴<sup>きゅうち</sup>」

まず、影に影があるのはおかしい。しかもそこから抑制の効いた言霊と共に、噴水のような黒影が瞬時に湧き上がった。

そのまま時雨の背後に現れた黒影が、見たことのある黒い柄の長剣で、時雨に袈裟がけに斬りかかった。

「オマエ——鶇から離れろ！」

鶇の腕はギリギリ掠めず、一人だけ斬り捨てられた時雨は最後に、笑って鶇を手放すように消えてしまった。

時雨が消える、と素早く予期したらしい黒影は、返す刀を捨てて落ちた鶇を受け止めようとした。しかし大した高さがない体勢のため、辛うじて滑り込んで鶇の下敷きになった。

「え……きゃ……！」

気付けば黒い背中に乗っていた鶇は、慌てて降りて両手を畳についた。俯せに倒れているのは、この国には無い無袖の燕尾服を着る青年で、背を強打したので息を詰まらせている。

「ごめんなさいっ……ねえ、大丈夫!？」

両腕をくの字に、べったり倒れているので顔は見えない。それでも先程のかすれたような声と、暗い部屋でも白っぽく見える髪は金色で、あまりにも覚えのある出で立ち。

「えっ……アナタ……」

いてて、と、笑うように言いながら青年が体を起こした。あぐらをかいてべたりと座り、体を竦めて苦笑っている顔は、紛れもなくかつての紫雨——金髪の彼で。

「……久しぶり、鶇」



確かにその声は、少し大人びただけのあの少年。けれど気配は、鶯の知らない色を帯びた青年。

シグレ、と鶯は、喉元まで来た声を抑えた。

「……嘘……」

化け物というものは、己の姿を変えられる者が沢山いる。だから姿より力——気配の同一性で、鶯達のように気配探知もできる者は他者を判別する。

それでいくと、この青年が久しぶり、と口にするのは「嘘」だ。鶯が会ったことのある気配ではない。

けれど鶯の靈感と目と耳は、青年がシグレだと訴えてくる。苦笑っている青年もおそらく、鶯がそう感じて困っているのを察している。

「……アナタ、は……」

ヒトが持つ「霊」や「気配」は、同じ者を示すようでいて、実際には器と中身の違いがある。

だから器だけはシグレのはずの青年は、改めて不審な己について、説明を加えたのだった。

「うん。鶯を守りに、天国から降りてきたよ」

つついっポカンとしてしまうほど、呑気な声で言った青年。無袖の白い内着と燕尾の黒い上着に、細身の鼠色の下履きも鶯は見たことがない。

「……何、言ってるのよ」

「あはは、ごめん。俺が天国なんて行くわけなかった」

「って、そういうことじゃなくて……！」

二つの名を持つ黒衣の少年が、御所の正門で養父に連れられ、初対面で椋紫雨と紹介された時に。先程黒い翼の少年が時雨と名乗った時にも、今と同じ違和感を鶯は覚えた。

「アナタは、違う、ヒトでしょ……!?! どうしてこんな、迷って来たりするの……!」

自分でも正直、何がおかしいのかを表し切れない。けれどこの青年も、ここにははいけない者だと。その予感が鶯の背筋をヒヤリと侵す。

斜め向かいに座り向き合ったまま、青年は多分違う意味で、それでも鶯の思いにうんうんと完全な同意を示した。

「それは、うん……俺も、頭が痛くて……—」

そして青年の懸念した通り、異物を咎める防人が訪れる。

がたん、とけたたましい音を立てて、廊下側の障子が投げ開けられた。

「てめええええ！ 夜に人の娘の寝所に押し入るたあ、首を差し出す覚悟はできてんだろうな、<sup>つぼめ</sup>燕雨ええ!?!」

御所中に響きそうな怒声を上げて、ずかずかと入ってきた浪人風の父。いつでも戦える身なりであれ、と常に刀も腰に差す侍が、「つぼめ」と青年を呼んだ瞬間に、鶯は糸が切れたように大きな脱力に襲われていた。

堅固な結界と娘バカの侍が守る「花の御所」に、侵入者を引っ立てる父の騒ぎが響かないように、鶇は気を取り直して人払いの呪を加えた。遭難していた気持ちはすっかりほっとしていた。

有り得なかった世界の夢。そんな言霊がふと、胸をよぎる。

「つばめ」という青年がいて、身近に古い女友達はいない鶇。悪いカラスの見えない空で羽ばたく小鳥達は、夢を壊してはいけないと知っている。

何がどうなったのかはわからないが、いなくなった少年は「天国から降りて」きた。もう一度人の世に巣を作るのだと、黒い益鳥の名前を受けて。

父が大人の緊急会議に青年を連れ込む前に、ついていった鶇は燕尾の黒い背中を掴み、必死にただ一つだけを尋ねた。

「ねえ——後でまた、話せるのよね!?!」

右腕を引っ張られて父に連行されている青年は、半分だけ鶇に振り返ると、当たり前だ、と嬉しそうに笑った。

「俺は鶇を、守りに来たんだから」

それなら青年は、この夢を終わらせはしない。つい先刻に現れた黒い翼の少年が、鶇に与えた根本的な不安が薄れた。「つばめ」が飛ぶなら、「シグレ」を探さなくていい。

今はまだ、鶇も上手く言葉にできない。けれどきっと、この「今」を招いたのは鶇だった。いつの間にかやんでいた雨の庭を後ろに、父達が入っていった黒戸を見つめていた。

\*

## ◆2 家族になる、とは



三年前の少年、「シグレ」が死ぬのは必定だった。養父母の敵の襲来がなくても、シグレは残り少ない命だったという。京都の南で大きな騒ぎが起こされたので、遺体を確認された椴紫雨が、籍まで抹消されたのは余分な事態だった。

親達の目を避け、鶯とシグレ共通の友達の家で邪魔して、今更聴かされたかつての事情に鶯は愕然としていた。

「それ……父上達は、知っているの？」

「つばめ」を名乗る青年は、ううん、と畳の上で首を振る。

「だから『山科燕雨』の籍があるんだ。俺がいつか、帰ってきやすいように、幻次達が別に登録しておいてくれたから」

剣の師匠を呼び捨てにする不遜な弟子は、大人達の会議が終わって後、夜中まで待っていた鶯に改めて名乗っていた。俺は今日から、山科燕雨——山科鶯の家族になる、と。

鵜とシグレの友達、猪狩 榎の自宅には誰もいない。榎は鵜の従兄弟達の従兄弟で、血は繋がっておらず、元は孤児の好青年だ。昼も夜も自営の商売に忙しく、それで空いている部屋を貸してもらい、二人で話すことができた。

友達の家へ忍びで行くので、鵜は昔と変わらない小袖と裕あわせで、紅もひかずに日傘を差して顔を隠してきた。右隣にいる燕雨が珍しい燕尾服で目立つので、あまり意味はないだろうが、燕雨と一緒に歩きながらひたすら嬉しそうにしていた。

「鵜、変わってなくて、ほっとした」

そう言われると複雑だった。本来、知り合いが相手であれば鵜は、有事には遠慮なく戦う武家の娘だ。この国で主流の化粧をすると、崩れるとか汗とか、余計なことが気になり動き辛い。異国の自然な装いに比べ、引き眉おしろいや白粉は大袈裟に過ぎる。だから古い巫女あそびめのような遊び女姿が鵜の定番だ。けれど鵜も、キレイになってはいたい。

変わっていない、は燕雨には良い意味なのだろうが、燕雨は細身なのに全身が昔より鍛えられ、身長も程良く伸びている。弱小だった紫雨時代の足運びは見る影もない。

「.....アナタは、何でそんなに、変わったのよ」

三年ぶりの、青年に成長した燕雨を見て榎も大喜びして、今日は早じまいして帰ってくるね！　と言って出て行った。死んだと言われていた者が顔を見せたのだから、従兄弟達も大歓迎で、用事がなければ今日も一緒についてきただろう。

俺、変わったかな？　御所でそう聴いた燕雨に、鵜は強い靈感での所見を伝えはしていた。

「凄く、ちぐはぐ。『時雨』なのに金の髪だし、目も紫と青の両方.....蒼に見えるから、何か違う力を身に憑けてきた？」

一息に言うと、青みの強い紫色——蒼の目をぼかんと丸くして、素直に笑って頷く燕雨だった。

「やっぱり、鵜は凄い」

そうして、自分が「時雨」の方だとあっさり認める。戦いにだけ生きていたあの頃の時雨と、全く違う柔和な笑顔で。

どうしてそんなことになっているか。燕雨の現状を尋ねた鵜に、燕雨は二人だけで話したい、と言い、今日は急遽この家にやってきたわけだった。

「幻次達には、俺が時雨なのは気付かれなかったのにな」

金色の髪で穏やかな彼なら、誰もが紫雨だと思うだろう。同じように昨夜に会った「時雨」は、銀色の髪なのに中身は紫雨だった。

この空気の違いは鵜も言い表せない。靈感とは違う何かで、鵜は燕雨が時雨だと感じていた。そもそも霊的にはどちらも同一人物で違いは乏しい。

そうして榎の家で二人になると、燕雨は三年前の真実を、囲炉裏を縦と横で囲んだ形で話し始めた。

「みんな、喜んでくれてるところ、悪いんだけど。俺は時雨だから、あまり長い間、地上では動けなくて……金、紫雨は三年前に、俺の代わりに消えた。昨日いたアイツは、紫雨の残滓みたいなものだって猫羽<sup>ねこは</sup>にきいたよ」

鶯が燕雨の手を取ると、炭火の暖も空しく、死人のように冷たい体がそこにあった。

猫羽というのは彼の妹で、今回はそもそも、猫羽の手引きで燕雨は地上に降りたのだという。

「鶯の様子が変、神隠しに逢いそう、って猫羽に言われて。もしかしたら、敵はオレかもしれないから、俺でないと鶯を守れないからしばらく降りてきてってさ」

「……猫羽ちゃん……」

シグレも猫羽も、出会う前から不思議な直観の持ち主だ。同じ直観を持つから兄妹、と互いを見分けられたらしい。

直観は靈感とは違う。靈感が目前のものの本質を視る静的な感覚なら、直観は移り変わる「その時」を観る動の感覚。靈感でも占いをすれば似たようなことができる。

しかし占いは「占おうと決めたもの」しか観れないが、直観は彼らの、五感や気配探知が及ぶ範囲なら、多くの情報を拾い上げる。その性質がとても諜報向きなので、猫羽など幼くして、鶯の従弟悠夜の隠密稼業を手伝っているほどだ。

時雨——かつての銀色の髪の少年が表に出る時、生命力を多く消費すると鶯は聴いた。そして今ここにいる金色の髪の燕雨は、父の仲間が紫雨の遺体を持ち去って、奇跡があれば再起できると、悠夜の占いで出た稀な未来なのだ。

「この体は元々、精霊族の『刃<sup>レン</sup>』のものだ。金色の髪は本来刃の色で、俺が刃を助けたから、刃はもう俺の体だって言う。俺は刃が買った、大昔の剣に宿ってた自然霊で……とっくに俺自身の命は尽きてるし、三年前にこの体も大ダメージで、紫雨の意識は消えたとし、刃の命も残り少ない」

現状はその、「刃の妖精」の命で体を動かしている。しかし鶯の危機が去れば、「天国」にすぐに戻る。父の仲間が紫雨の遺体を持ち込んだのがその天国らしい。

「そんな……そんな状態で、昨日みたいな力を使って……」

「いや、戦闘だけはむしろ大丈夫なんだ。今の俺は、シアの使い魔みたいな状態だから」

曰く、天国を守る父の仲間——シアという数多の翼を持つ悪魔が、昨夜の力の源だという。鶯も何度か会った相手だ。

そもそもからして、「シグレ」は死者だった。それなら占いで明るい結果が出るわけもない。ここまで詳細を知っていたわけではないが、あの頃の少年が不自然な存在であることは鶯達も気が付いていた。

「だから、せっかく、山科の名前をくれたのは嬉しいけど。何でアイツが現れたのか、鶯は今後、大丈夫なのか、それがわかれば俺は帰らなきゃ」

「天国にいたら……アナタの体は大丈夫なの？」

「あそこは強い自然の力が還る場所だから。意識を保つだけなら、大丈夫だったよ」

そこまで話すと、ふう、と。説明できて安心したように、燕雨は後ろに手をつけて力を抜いた。

「幻次達には内緒にして。心配するだろ、みんな」

満足そうな燕雨とは裏腹に、鶯は心中、穏やかではない。鶯が違和感を尋ねたから話してくれたが、放っておけば何も言わずに、事が解決すればまた消えてしまったのだろう。

鶯は黙り込んで、俯いてしまった。実際問題、燕雨をこの状態に持ち直させたのは翼の悪魔で、鶯には話してもらった弱味を何とかしてやれる対案もない。

だから燕雨に、帰らないで、と言えようわけもない。

「.....どうしても、御所にはずっと、いられないの？」

よりによって鶯の寝所に現れた燕雨を、昨日こそ父は散々怒鳴っていたが、家名を与えるくらい可愛がっていた弟子であるのに。絶対婿でなく養子！　と言いつけてはいたが。

養子。もう抹消された檜紫雨でなく、鶯の父の山科となる。鶯は母方の公卿烏丸からすまと父の山科を両方使うのを許されており、大体山科鶯で名乗っているが、重視される家柄は烏丸鶯だ。

父達が何を話し合ったかは知らないが、山科の存続を本気で考えているわけではなさそうだった。だから燕雨も簡単に、帰るなんて言ってしまう。

「地上で生きる方法を探せて、シアには言われ続けてる。でもそもそも、この体は俺のじゃないし.....」

鶯の重い空気を、直観でしっかり感じたのだろう。だから多くの言葉を必要としない二人だが、こういう時には空気が暗く澱んで仕方ない。

鶯も色々と、ぐるぐるしている。

燕雨がシグレの頃から、鶯を大切に想ってくれているのは知っている。けれど昨夜の時雨も燕雨も、愛を囁いたわけではない。鶯にも彼らは大切だが、家族以上への想いか、と言われると自信がない。

燕雨が山科を名乗ってくれるのは嬉しい。そうして帰れる場所を用意していた父達も大好きだ。命が危ない、と真実を言わなくても、燕雨が行きたい場所に行け、とこの先父達は尊重するだろう。誰も彼を止める者はいない。

「.....鶯は、俺が地上にいた方がいい？」

鶯の逡巡をまっすぐ見透かされ、かぁっと顔が熱くなった。

燕雨は俯く鶯を見つめながら、前かがみで掴み所のない顔をしていて、思えばこんなに率直に話したのは初めてだった。

昨夜、時雨に初めての口付けを奪われた鵜は、後に現れた燕雨を普通に見ることができていない。

背から服を掴んだり、隣を歩くのは大丈夫だったが、燕雨も鵜の気持ちを汲んで半分だけ振り返り、今も囲炉裏を斜めに囲んでくれている。まっすぐなことを尋ねて鵜を見つめても、直視にはならない気遣いが咄嗟にわかった。

そういう水面下の心配りが直観の特徴で、燕雨も猫羽も、何となく人に好かれていることが多い。とはいえ、きく時にはこうしてまっすぐ問いを立てるので、鵜は答に困る。

「……燕雨は、こっちにいたくないの？」

質問に質問で返してしまったが、どうせ答は伝わっている。

そばにいてほしくない相手に、また話せるか、なんて鵜はきかない。燕雨もわかっているくせに、と内心で呻く。

期せずして腹の探り合いになり、燕雨は鵜の赤面を覗てか、ごめん、と一言、苦しうに笑ったのだった。

「俺は……」

鵜もそこで、燕雨がずっと、遠慮がちなのをようやく悟る。

鵜を守りたい。それは何から、そして、どうして。肝心な部分を燕雨は言わないできている。その想いが鵜に知られているとは気付いているのに。

「アナタの状態は、よくわかったから。……でも、アナタがどうしたいかは、言ってくれないとわからないの」

もしも燕雨が、それを望むなら、鵜は燕雨について天国に行ってもいい。そう思った瞬間、燕雨が同時に真顔になった。

「鵜……」

はっ、と鵜は両手で口を押えた。それも無意味で、直観はとにかく、詳細はどうあれ想いが伝わってしまうのだ。

昔は霊的な結界を張ってでも、内心を覗られるのを防ごうとしていたが、今は思い付きもしていなかった。

燕雨が望めばついていく。多分気取られてしまった想いで、全く燕雨を見れない鶴と対照的に、燕雨は穏やかに鶴を見る。

「.....ごめん。俺がどうしたいかを言えば、きっと鶴は困る」

だから言わなかった。鶴から視線を外して燕雨も俯く。

「天国で目が覚めたことも、言うなって猫羽に口止めした。シアも猫羽も、帰ればいって言うけど、俺は.....」

そこでまた、声を止めてしまう。思えば彼は、昔からそうして口を噤んできた。鶴もそういう人間だからわかる。

三年前なら鶴も、これ以上は言わなかった。けれども今、ここにいる彼が、いつまた消えるかわからないのなら。

「——」

軽く腰を上げて、燕雨の後ろに回って膝をつくと。鶴は、昨夜よりもう少しだけ、この相手に踏み込むことを決める。

「.....」

黒い燕尾の背中を掴み、ぴったりと自分の額を押し付ける。虫の息よりも細い、燕雨の呼吸が止まったのがわかった。

「.....困ってもいい。.....言って」

ヒトの温かみを感じられない、冷たい背筋。心臓の音すら聴こえるのかどうか。鶴は精一杯、燕雨の心の欠片を探す。

やはり、この様子は銀だ、と鶴は思う。金髪の紫雨を金、銀髪の時雨を銀、と昔は呼んでいた。

金、紫雨は鶴へ好意を表すのをためらわなかった。幻次はどうやったら倒せるか、なんてきいてくるのだ。

反面、銀は会いたかった、それだけ。今と何も変わっていない。

「.....鶴」

昨夜のせいで、まっすぐ顔を見ることはできそうにないが、精一杯にくっつく鶴に燕雨は観念したように見えた。あえて振り返ることはしないままで、感情を押し殺した声で言う。

「.....会いたかったよ。俺もアイツと、何も変わらない.....鶴が欲しい、ずっと」

鶴を守りに来た、と燕雨は言った。だから容赦なく斬って追い払った時雨を、責めてはいなかったことに思い当たる。

「今俺は刃だから、何もしないだけで。アイツのことも俺のことも、鶴はもっと警戒した方がいい。.....隙だらけだ」

振り向かないのは、燕雨の自制も大いに入っているらしい。

確かに現状、煽っているとも言えるのは鶴だ。まさか友達の部屋で襲われるとは考えにくく、そして鶴も長年、言いたいことがあったのだからどうしようもない。



「私は……アナタが望むなら、連れて行ってほしい」

込み上げてくるこの感情が、何であるかは考えなかった。燕雨がどう受け取ってもいいのだ。

欲しいと言ってくれるなら応えたい。その心を何と云うのかは、鶯にもよくわからない。

燕雨がごくり、と息を飲んだ。小さな震えが後ろに伝わる。

囲炉裏の横で、縋りつくようなひと時はどれくらいだろう。燕雨は俯いて黙っていて、鶯もそのままだった。

困っているのは、むしろ燕雨だ。鶯には何だか、部屋中が温かくなってきた気がした。

大切に育てられた鶯にとって、花の御所は心地の良い鳥籠。

けれど空を飛びたい想いだってある。一緒に旅をしてくれる誰かがいるなら、小さな鳥でもきっと大空を往ける。

「……俺は、鶯は、幻次達の所にいてほしいよ」

なのに燕雨は、鳥籠にいろと言う。これも本心であるから、燕雨自身悩んでいるのだろう。

「俺は、山科に——鶯の家族にしてもらえただけで嬉しい」

鶯が欲しい。けれど鶯を、連れていくことはできない。

剣の師である父への遠慮もある。養子と言うのは父も最大、燕雨に示した親愛なのだ。けれどそれを燕雨が言うなら。

「それなら……これからは本当に、一緒に生きていくの」

掴んでいた両手を離すと、燕雨はそっと鶯に振り返った。その顔に浮かぶ心許なさを、やっとまっすぐ見つめられる。

「アナタはうちに、帰ってくる義務があるんだからね。私、家族がいなければ探しに行くから。シグレでもつばめでも、来てって言われたら、ついていくから」

自分で言いながら、ああ、と、猫羽が鶯を心配した理由がわかった。

今の鶯は昨夜のように、多少時雨が強引に出ればほだされてしまう。その揺らぎが危機の本質なのだ。

膝で立ったままの鶯を、肩越しに見つめる燕雨の、切なげな蒼い目を見返す。鶯に伸ばせずにいる手を、両手で包んだ。

これまで鶯に、好意を向けて来たのは燕雨だけではない。政略婚の申し込みもあれば、御所での顔見知りの求婚もある。

けれどもし、連れて行って、と思う相手がいれば燕雨だった。それは今までの、死別の距離がもたらした想いだろうか。

実際鶯は、もう一度会えるとは思っていなかった。紫雨の遺体を持ち去った翼の悪魔も、父達の前から姿を消している。大事なものを失ったから悪魔になった者が、死者をどうこうできる力を持つとは思えなかった。

「だから……隙だらけだ、って」

左手を握られた燕雨は体を振り向かせつつ、右手をふっと鶯の後ろに回した。そこから鶯を自分の膝に運んでいた。

「——」

蝶の羽と、棘の鎖の腕輪をしている右腕が触れたのは一瞬で、鶯を横向きに膝に座らせただけだ。細い指が震えていて、これ以上鶯を掴みかねているのがわかる。

鶯の髪に頬を寄せて、鶯に握られていた手を上から包んで。それだけで燕雨は息をついた。

簡単に逃げられる体勢なので、鶯はむしろほっとする。

恥ずかしさはあるので両目を閉じて、身を預けるようにフウ、と肩にもたれかかった。

眠ってしまいそうな程に、静かだった。ぴったりとついた耳を澄ませてみても、燕雨の鼓動は聴こえてくれない。

燕雨の背丈が伸びているので、鶯の頭上をちょうど燕雨が塞いで納まりが良かった。抵抗せずに燕雨の首元に項垂れる鶯に、燕雨がぼんぼん、と鶯の肩を叩く。

「鶯。これ、逃げるところか怒るところ」

目を開けて顔を上げると、燕雨は安らかそうに微笑んでいた。

お互い、幸せな空気が漂っている。良かった、と余計に心が落ち着く。鶯だけ真っ赤であるのが少し悔しい。

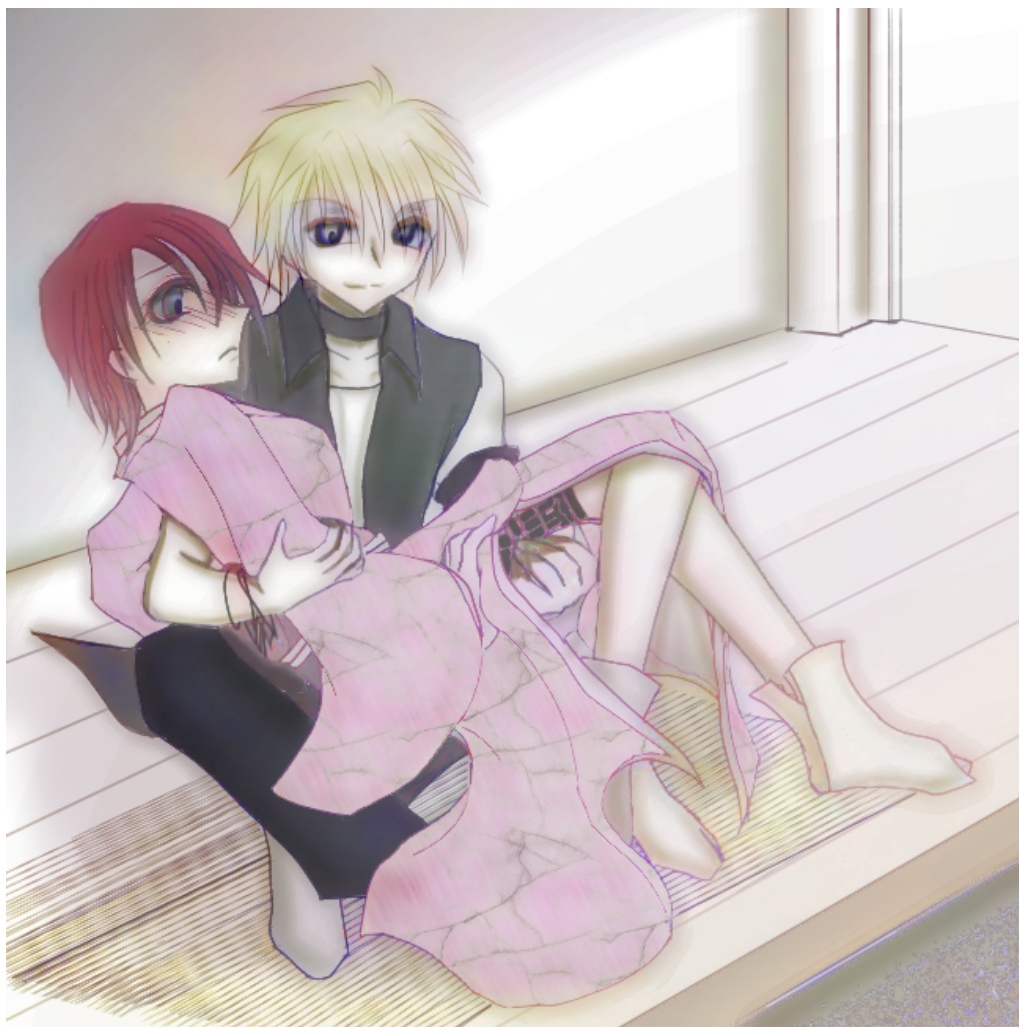
「もし式神に見られてたら、幻次に殺されるかな？」

「……いないし。そんなのいたら、私が追い返すし」

あながち、父の性格を考えると有り得ないことではない。父自体は呪術を使えないが、母や叔父に頼む可能性はある。

そっか、と。  
何処か吹っ切れたような声で、燕雨が唐突にふわりと、心から嬉しそうな顔で笑った。  
「鶇——好き」  
「って、バカっ、今わざわざ言わなくってもっ……！」

「鶇が欲しい」の時点で、愛の告白は終わっている。そう油断していた。  
そもそも今まで、全身で伝えられ続けていた好意だから、鶇だってこの膝抱きを拒否しなかった。  
「大体さっき、家族って言ったばかりじゃないっ……！」  
膝から立とうとすると、抱き締めてくる両腕に阻まれた。鶇の前髪に口付けをするように、顎をさらりと滑らせてくる。  
「うん、猫羽もよく、膝に乗せてたけど？」  
そういうことじゃない！ と叫んでも後の祭り。  
しばらく燕雨の腕の中で、やっぱり好き、と言われ続けた鶇だった。



貸してもらった場所の主、帽子の似合う異国の服装の櫛が帰ってくると、燕雨はあっさり朴訥な「銀」に戻っていた。

「ええ、じゃあ今後は燕雨君って呼べばいいんだ！ 本当に山科の人になっちゃうんだね、凄いねー！」

「うん。あくまで養子、って言われてるけど」

「ええ、大丈夫だよ、婿養子にはまだ変えられるし！ まずは外堀を固めようよ、目指せ鶯ちゃんとツンデレ夫婦ー！」

鶯はつい先刻まで、抱き締めて口説かれ続けたショックで、二人の話が全く頭に入らない。

昨夜の時雨ほど強い行動には出なかったものの、甘い態度の点では密かに上だと言えた。普段の様子が硬いので尚のことだ。

「ねえ、鶯ちゃん！ もう燕雨君を逃がしちゃダメだよ、鶯ちゃんを狙う縁談相手とか鉄格子の部屋とか作って、御所にずっといてもらわないと！」

「——え!？」

斜め前で燕雨と並んで囲炉裏に当たる櫛に、突然に不穏な話を振られた。

脈絡がわからない鶯より先に、燕雨が応える。

「外堀って、そういうものなのか？」

「だって燕雨君、鳥籠がないとあっさり飛んでっちゃんそうじゃん！ この三年、鶯ちゃんがどれだけ、落ち込んでたと思ってるの？ 鶯ちゃんだから今まで通り暮らせてるけど、人によっては涙の後追いとか辛い思いを忘れるためにお酒に逃げるとか出家とかしちゃうんだからね！ 縁談断り続けて操を守るなんて貴族には普通ないから！ わかってる!？」

櫛は幼い頃からずっと、やたらに想像力が豊かだ。大きく心配しているようには見えなかった三年なのに、鶯について何故か櫛が力説している。

燕雨もしれっと、まるで父のようなことを櫛に返す。

「うん、この先俺も認める奴以外、鶯を渡すのは嫌だな。櫛、良かったら協力して」

「何かちょっと微妙なフラグ入ってる気がするけど、うん、僕にできることなら何でも言っよ！ 鶯ちゃんを絶対に、もう悲しませないでね!？」

鵜と従兄の烏丸蒼潤そうじゅんと、櫛は同い年であるのに、本人は薬師で、手がける商売は医療から芸事まで幅広いやり手だ。二階の部屋を借りているこの家も、一階は雀荘で夕方からは客足が盛況となる。

燕雨はありがとう、と笑うと、そこから思いもかけない話に飛んだのだった。「じゃあ相談したいことがあって。京都で何か、俺みたいなならず者でも、日雇いでできそうな仕事ってある？ 御所の見回りは今のところ、人手が足りてるって言われて」

え。鵜と櫛、両方がぼかん、と燕雨を見つめる。

つい先程、地上では長く動けない、と言った燕雨が、何故そんなことを言い出すのか、見当がつかずに怒ってしまう。

「ちょっと、アナタ、体は大丈夫なの!? 今はしばらく、御所でゆっくりすることを考えなさいよ！」

鵜の剣幕に、櫛がしばらくしてから、安心したように笑い始めていた。

凄い、二人共もう夫婦みたい、と。

そろそろ雀荘が開く時間、と、屋下がりに櫛の家を出た後、鵜は歩きながら抑えていた疑問をまくしたてた。

「働くって、どうして？ 何か不足なものでもあるの？」

昨夜の会議中、御所の人手は足りていると言われたなら、父達が燕雨を気遣っての言だろう。彼は死んだはずの相手だ。

結局燕雨は、それならまず、僕のところでバイトしてみる？ と提案した櫛に、ありがたく乗ってしまった。

先に最低限のお金や算術の知識を教えることになり、それは鵜が請け負ったものの、根本の謎は何も解決していない。

「どうして、って……御所に長くいるなら、俺、鵜やみんなにお土産できるくらいの稼ぎはほしいよ」

「——」

長くいるなら。至って素朴に返された言葉が、まっすぐに鵜の胸を穿つ。

「御所というか、鵜の護衛に響かない程度、と思ってるけど」

「で、でも……長く、いることって、できるの……？」

この件が終われば帰る。あっさり言った燕雨の顔が浮かび、立ち止まってしまう。

商店街に近い小川沿いの道で、枯葉を落す木の下に止まった燕雨は、鶇の言いたいことをわかったように軽く微笑んでいた。

「うん、それ。さっきちょっとだけ、解決法ができた」

「——え？」

地上で生きられる方法を探す。その話だ、と鶇も察する。

「でも俺が困るところもある。まあ……悩んでる間くらい、体が持つ程度には、何とかなりそう？」

だから心配無用、と笑う。それはとても自然な笑顔だった。

こうして見ると、「銀」は本来、とても穏やかなヒトなのだとわかる。戦う時にあれだけ冷たいヒト殺しと化するのは、そこまでしないと逆に戦えないからだろう。

その本質は鶇もわかっていた。父を含めた御所の面々も、だからこの相手を何とか守ってやりたいのだ。

「解決法って……さっき、って？」

「もう少し悩んだら、それも後で話すよ。まずはちょっと、猫羽にでも相談してみるかな……」

あまりに燕雨の様子が平和だったので、その後は何も追及できずに帰路についた。

御所に着くと、正面玄関の裏にある腰掛石から、待ちかねていたらしい少女が迎えに出てきた。

「お帰りなさい、ツグミ。それに……燕雨兄さん」

衿下の短い、「ミニスカート」なる桃色の小袖で、猫の耳のような小さなお団子を二つ巻いて、残りの黒髪は下ろす異風の少女。

御所に来る時はいつもこの恰好の、<sup>うつき</sup> 鶇猫羽だった。

「わたし、今日から、兄さんの監視役だって。ツグミに手を出しちゃダメだからね、兄さん」

あはは、と笑い返す燕雨と、常に無表情でも、嬉しそうに猫のぬいぐるみを抱えている猫羽。

しばらく御所に滞在する兄妹について、鶇もやっと、安心して微笑めたのだった。

\*

### ◆3 酒と女とスポットライト



本当なら死んでいる自然霊が、瀕死の妖精の体を動かして生き続ける方法。

妹を迎えた自室で過ごす燕雨が、櫛の下で働く前に基礎知識の勉強中に、教師の鶴に話してくれたのは数日後だった。

二人きりは駄目だ！ と父が言うので、猫羽もいる部屋で休憩の時に。ぐったりしている燕雨が、ぼちぼち話し始めたことには。

「人間って、凄いな、これ……刃の記憶があるから、何とか俺もできそうだけど、勉強、気力の消耗が激しい……」

見るからに疲れているので、鶯もなるべくゆっくり教えるのだが、むしろ燕雨が早くやろう、と焦るのだ。

隣に座っている猫羽も、小さくため息をついている。

「ダメだよ、兄さん、刃は勉強が大嫌いだから。無理するとすぐに、刃の体の方が先に拗ねちゃうよ」

どういふことか、と尋ねると、精霊族の中でも「妖精」は、好きなものから生命力を得るのに特化した化け物だと言う。

元々旅芸人一座の護衛をしていた妖精は、旅の知識やお金の使い方は心得ているが、商売についてはまるで興味を持たず、記憶がままならないと燕雨が嘆く。

「兄さんの気力も、刃の体力もギリギリなんだから、無理は絶対ダメだよ。ね、ツグミ」  
冷静に燕雨を監視する猫羽に、鶯も全力で頷くしかない。

そして、妖精のそうした性質こそ、燕雨が長く地上にいるための方法の一つだと話した。

「刃は女の子が大好きだから、鶯や猫羽といるだけで元気になってる。体は持ちそうだけど、俺の方はひたすら眠い……」

「……」

櫛くぬぎの家で鶯を抱き寄せた時に、その女好き効果を確信したらしい。猫羽に後でできたことには、天国にいる時から、鶯ちゃんに助けてもらえば御所にいられるよ？ と翼の悪魔に言われていたそうだった。

何とも複雑な気分で黙った鶯の前で、猫羽が徳利を出す。

「はい、兄さん。今日はゲンジお父さんお勧めの日本酒」

燕雨は本当に荷物が少ない。着る物は御所支給の法被丈ほっぴの小袖がほとんどで、左腕に巻く黒いバンダナと右手首の腕輪、たまに着けている黒牙チョーカーの首輪があればいいと言う。

その他に唯一持ち歩く小さな金属の水筒は、緊急用の酒器だと教えてくれた。刃が特に好きなのは、酒と女と剣だから、と。

沢山は飲めないと言うが、昼間から酒瓶を持ち歩き、女好きの体という年頃の青年。父に知られれば、色々と派手につっこまれることだろう。

それでも櫛の営む雀荘においては、逆に良い、と高評価を得ている始末だ。

「燕雨君、もう常連さんに溶け込んでるよ。さすがだなあ」

幸いなことに、刃の妖精は遊戯も大いに嗜んでいたようで、麻雀は苦勞せずに燕雨も覚えられていた。点数計算など鶯も怪しいところがあるのに、妖精の嗜好は偏っている。

「アンタもよくやるわよね、櫛……日中から酒浸りの連中を相手に、違法すれすれの賭け事なんて……」

猫羽を同伴すれば、燕雨の雀荘勤務に付き添っても良いと、鶯は父に許可を取った。猫羽の裏には従弟の悠夜、ひいては悠夜の父、鶯には叔父の頼也よりやがいるからだろう。父は頼也の兄貴分かっ護衛で、母や叔父の言うことだけはきくのだ。



一応才覚を褒めたつもりの鶴に、櫛はぶるぶる首を振った。  
「うちは至ってクリーンだからね！ 点数ごまかしも不当なレート釣り上げも一切しないし、お客さんも皆優しいし！」

それは櫛の言う通りなのだが、新しい店側の打ち手である燕雨が雀荘に現れてから、にわかには売り上げは増加していることを鶴は知っている。

商売事において、信頼関係が大事であると知っている櫛は、決していかさまなどすることはない。

ただし、新たに雇った雀士の青年が、「直観」という現状把握能力を持っていること、それが勝敗に影響するなどとは、公表していないだけだ。

「燕雨君って凄いよねえ、ビギナーズラックなんてとっくに終わってると思うのにね。何かこう、まるで心を読まれてるみたいだって、たまに苦情も来るんだけどね」

実際燕雨の勘の良さは、同じ直観の猫羽を可愛がる櫛には予想がついただろう。喰えない奴、と鶴は唸る。

酒ばかりを飲み、人当たりも素直で実直な燕雨は、男性がほとんどの店での客受けが良かった。

大体昼下がり、申の時から鶴の門限まで卓を囲んでいる。店自体は深夜まで開いているのだが、鶴を優先するよう櫛も勧めている。

「女の子のお客さんが少なくて良かったなあ。ね、鶴ちゃん」

「.....」

既に御所では、官女達への燕雨ウケはかなり良く、異人の様相でなければ山科家への縁談申込も有り得る勢いだった。猫羽が常にそばにいたので何とか女除けになっている。

顔をそらす鶴に、櫛が嫌味なく笑う。客は優しい人ばかり、そう言う櫛は店内でなるべく揉め事が起きないように、客層をさりげなく絞っていると悠夜が教えてくれた。それでも商いが成り立つのだから、本当にやり手な櫛なのだ。

「櫛こそ.....いつまで忙しく、お金稼ぎばかりしてるの？」

「うーん。何かこう、運命の出会いみたいな、ばーん！ とくるもの、僕もほしいとは思うんだけどねえ」

素直にしゅん、とした櫛に、ちくり、と何故か胸が痛んだ。

櫛、従兄の蒼潤と鶴は昔から、本当に気安い身内で友達だ。けれど時々、一緒にいるとわけもなく淋しくなる瞬間がある。

「あ、燕雨君、今日は苦戦してるみたいだ。タカさんは本当古い鉄壁だから、なかなか勝ち越しは難しいねー」

さらりと櫛が話を変えたので、鶴も店の中を覗いた。猫羽が鶴の隣で、深い黒の目で黙って二人を見つめていた。

古来の剣に宿り、持ち主の妖精の体を使う自然霊。

そんな燕雨が持つ直観は、他者の感覚を我が事のように感じ取る、壊れた五感だった。そうでなければそもそも、自分以外の者に宿り、体を動かすことなどできないだろう。

他の客二人は沈んだ卓で、タカと呼ばれた常連の浪人を前に、腹を探り探り牌を打ち合う燕雨に鶴は溜め息をつく。

「くそう、おめえいつも、すかした顔で安パイ振りやがって。勝負を降りたように見せかけておれは騙されないぞ」

「タカこそ、俺じゃない方を今は警戒してるくせに。タカの駆け引きはわかりにくくて、上手いよ」

もう勝つ目は少ない、他の客のことも彼らは忘れていない。

四人で打つ麻雀は戦略、駆け引き、それに運の要素が大きな遊戯であるため、燕雨の直観でも完封することはできない。

それでも巧みに空気を読んで、幸運のツモや他者の振り込みで以外、周りに勝たせない燕雨は早くも雀鬼の称号を得ていた。

はっきりと心が読めるわけではないのに、そこまで周囲の思惑を探れてしまう直観は、鶴達呪術家に言わせれば、酷く強い「憑依体質」だった。

「……猫羽ちゃん。猫羽ちゃんはあるなりに、周りに溶け込むようになっちゃダメだからね」

「うん。読み過ぎるとしんどいの、兄さんもわかってるけど」

すぐ近くにいる者達が何を感じているか、その場で感覚を共有していく直観。それは最早、相手に憑依した状態に近い。

そして妖精は精霊族という、本来は自我のない化生の一派。好みという偏りを持った精霊が妖精となるが、精霊自体は元々自然界と一体で、自然界の力を扱えるものに使役される「力」だ。それで自然霊である燕雨を憑依させられるのだ。

鶴と猫羽と、そして悠夜が、燕雨の事情を細かく知る者であるという。

猫羽の養父も大体は察していて、先日御所に養子縁組のお礼で訪ねてきていた。遠征中らしくすぐ帰ってしまったものの、猫羽と悠夜に特に燕雨の補助を頼んでいたという話だった。

「ツグミ……どうして、怒ってるの？」

受付の裏で、遠目に燕雨を見守っている中、猫羽がふっと鶴の着物の袖を掴む。鶴もはっ、と我に返った。

「ごめんね。別に怒ったわけじゃなくて……私にできること、何かないのかな、って思ってるだけ」

「……………」

猫羽は燕雨よりも、ぼやとした感情の気配を広く察する直観なのだ。燕雨は五感で拾える情報を探り、猫羽は気配をかなり遠くまで窺うことができる。

「……ツグミのおかげで、兄さん、ここにいてくれるのに」

無表情でも悲しげに、座布団に正座する猫羽が首を傾げる。

燕雨に会えない期間は同じだった猫羽は、淋しかった時間を取り戻すように始終燕雨にくっついている。本当の家族ならそうできることを、少しだけ羨ましく思う鶴だった。

その日は、浪人と燕雨の接戦が続き、休憩時間がほとんどなかった。

途中で猫羽が甘い物を食べたいと言い出し、櫛が別に経営する店舗を見回りがてら、猫羽を茶屋に送っていくと言って、鶴に受付を任せることになった。

「鶴ちゃんが付添いで毎日来てくれるの、本当助かってるよ」

櫛はこの家で雀荘を営みつつ、受付で暇な時間は菓を調合しており、たまに違う商いをする店舗を忍びで視察に行く。その時に受付を代わる鶴がいると重宝される。

給金も払うと言われたのだが、水臭い、と断っている。

そんなわけで受付に座っていた鶴を見て、浪人「タカ」が何やら嬉しそうに、燕雨に絡み始めていた。

「おめー、明らかに集中力落ちたな、雀鬼さんよお」

「タカには敵わないな……それはいいけど、いい加減、お酒飲み過ぎだよ、タカ」

「うるせー、これが飲まずにやってられるか。山科んとこの筋肉バカに跡取りができたなんつーから、誰かと思ってたらこの道四十年のおれをおびやかす雀鬼だって？」

浪人は何と、父の旧知者らしい。鶴の赤い髪は父と同じで、うっかり娘だと名乗れる雰囲気ではなく、はらはらしている鶴に燕雨が苦笑う。

「四十年も、やってないだろ、タカ」

「あぁ？ おれをバカにするのかよ、おめえ」

「タカにはもっと大事なものがある。でも、そっちが今ではできなくなって、憂さ晴らしをしてるんだろ」

珍しくよく喋る燕雨に、鶴だけでなく浪人も目を丸くする。

「山科め、敵の情報はっきり伝達済みってわけか。そんなことでおれが動揺すると思ったか、雀鬼！」

「思っていないけど、酒はやめろ。タカ、これ本当に、死ぬぞ」

「あーあー、大丈夫さ、細かいことは言ってんじゃねえよ。おれにはいつか、いい日が向こうからやって来るんだよ」

後で櫛に、毎回菓を渡しているほど浪人の体は悪いと鶴は聴く。

普段は遠慮がちな燕雨が、直観を口にするほど強く。

その後、もう半荘するには門限に間に合わない時間になり、燕雨は普段より早く上がった。

帰ってきた櫛も浪人を説得し、他の卓から人を呼んで事なきを得ていた。「猫羽ちゃん、梅さん常駐の茶屋にいるから、帰りに迎えに行っておいて。久しぶりで話が弾んでみたい」

「ありがとう、櫛。行こう、鶯」

鶯の手をひいて店を出る燕雨に、浪人から、また来いよ！ と声がかかる。燕雨はそれに、嬉しそうに笑い返していた。

「うん。また遊ぼう」

浪人も良い顔をしていた。口は悪い方だと見えるが、単に照れ屋かもしれない。もしくは燕雨が人たらしであるのか。

父の知り合いが気になって、鶯は気付かなかった。燕雨と手を繋いで夜道を歩くなど、猫羽がいればなかったことだと。

「これ、猫羽からのボーナスタイムかな」

外に出てから真っ赤になった鶯に、また微笑む燕雨だった。

猫羽は当初、監視と口にした通り、鶯の父に頼まれ燕雨を見張っている。御所に泊まる大義名分かと鶯は思っていたが、父上なら本気で頼みかねない……と今更に自覚する。

燕雨が負け越していいよ、とあっさり席を立ったのも、鶯と二人で歩ける時間を長くしたいからのようだった。

「アナタ達二人は、いつもそんなことに、気を使ってるの？」

「猫羽はまずオレを疑ってるから。鶯を最初に襲ったのは、俺の力の暴走じゃないかって」

そんな馬鹿な、と思うものの、現在燕雨は翼の悪魔の後ろ盾を得て、多様な戦い方ができると聞いた。

あれから時雨も現れておらず、占いでも正体の解析ができていない。

鶯と優しく連れ立つ燕雨の左手は、今も相変わらず冷たい。

「俺も正直、自信はないよ。だって俺は——」

その時、街灯の上から突然、夜には有り得ないはずの烏の大量な羽音がした。

はっとした鶯の手を咄嗟に引っ張ると、前に出た燕雨が腕輪のある右手を突き出していた。

「刃、黒鍵F# / 羽！」

茶屋に向かい歩いていたのは、ただの閉まった商店通りだ。ひとけが全然ないことは不自然で、姿の見えない烏の黒影が頭上を沢山よぎる。

影は全て、見えない無数の刃に斬られたように、鶯の視界から消えていった。

一瞬の攻防を、何が起きたか見切れるのは鶯だからだろう。

「……今も、アナタの暴走だって言うの？」

鶇と燕雨、どちらを狙った影かはわからなかった。けれど黒い影が消えて、街の人々の気配と明かりが戻ってきた。

いつの間にか、黒い影の縄張りに引き込まれたのだろう。人が少ない道を選んでいたので、違和感に気付くのが遅れた。

周囲を窺うために物陰に入り、少ししてから燕雨がこたえを返してくる。  
「かなり多い奴に囲まれてた。さすがにあんなに沢山は、俺も無意識には動かさせないと思う」

商店と商店の暗い隙間で、鶇を守るように懐に隠す燕雨。  
何も考えずに、鶇も胸にしがみついていた。怖かったのではなく、あの影には燕雨が連れていかれる気がした。

鶇が落ち着く前に、燕雨はふらっと倒れそうになって言う。  
「ごめん、ちょっと、補給、させて……」

あっ、と瞬時に鶇は悟る。  
「ちょっ……！」  
腰にすっと両手を回され、ぴたりと燕雨の胸に埋められてしまう。敵が多かったので大きな力を使い、「好きなもの」を彼の体が欲しがっているのだ。

普段の鶇ならきっと反射的に押し返したが、びくっとした手はむしろ恐々と、俯きながら燕雨の背を掴んでいた。

「——……」  
無言でただ、正面から抱擁される時間。  
燕雨の腕は指の先まで、凝り固まった鶇を甘く捕まえるのに、触れている体は冷たいままで。  
恥ずかしい以上に鶇は、何だか悲しくなった。

しばらくは同じ体勢のままで。  
暗がりですぐ抱き合ったまま、燕雨が鶇の頭上で拙く呟く。  
「……ごめん、俺も正直、自信ないのは……ずっと、鶇と、こうしてたいから」  
「……………」

それは、女好きの妖精の体だから言うことではないのか。思わず考えてしまう。鶇でなくても、別に良いなら。  
「だから……言おうか悩んだんだ。鶇はきっと、助けになるならって、今みたいに無理をするから」

ふ、と、鶇に違う火がともる。燕雨は何を言ったのだろう。

「私が……無理？」

全身を染めていた緊張が緩んだ。それは多分、燕雨の声がどこか、泣き出しそうな色だったからかもしれない。

「鶇は優しいから……つけこんで、ごめん」

命の補給。そう口にしたのは燕雨だ。

今、黙って燕雨の腕に抱かれる鶇は、冷たい死者への情け故だと思っているのか。

ずっとこうしていきたい。自身の望みを滅多に言わない彼が、心から謝るように呟いたこと。

もう充分、動ける力は戻っているのに、鶇を離そうとしない燕雨の望み。

悲しい。先刻、そう感じた理由がわかった。

僅かに緩んだ燕雨の腕の中で、鶇はすると、燕雨の肩に両手を回した。

「——」

顔を上げたので、燕雨がこれまで目を閉じていて、そして今開けたのが見えた。

燕雨の潤んだ蒼い目には、罪悪感が満ちている。

「……無理じゃ、ないから」

できるだけ、緊張が戻らないように言った。

女なら誰でも彼の力になれるのではないかと、思ってしまったこと。

鶇に会おうと、それで天から降りてきた青年を知っているのに。

「……鶇……」

どうしてこんなに、遠回りをしているのだろう。鶇だけを見つめる相手に、見つめ返す理由は必要なのだろうか。

その双眸を笑顔にしたいのだと、鶇の気持ちも伝わってほしい。

鶇が優しいのかどうかは、燕雨が好きに受け止めること。

燕雨の首を抱き寄せた鶇と、間近で見つめ合った刹那、互いにそっと両目を閉じて。

ゆっくりと、唇を重ね合っていた。

「——……」

ためらい、愛しく撫で合っているような、儂い触れ合い。

とても長い時間、そうしていたように感じられた。

やがて燕雨が腕をほどいて、背伸びしていた鶇を下ろした。

「……猫羽が待ってる。行こう」

今更顔が熱くなった。それでも、夢のような一時だった。

燕雨も目的の茶屋につくまで、鶇を見れずにはにかんでいた。お互いにさぞ、赤い顔をしていたことだろう。

ちなみに猫羽の茶代は燕雨が払っていた。そうした振舞いに憧れていて、働きたかったらしい。

自分の物は湯あみ時の整髪料くらいしか買わない燕雨で、それも鶯が勧めた故だ。短い髪が朝に暴れる悩みは、鶯も仲間なのだ。

幸せとは、こういう時間。そう思わずにいられなかった。



御所に帰ると、今日はツグミと寝たい、と猫羽が部屋までついてきていた。

猫羽は御所に現れた頃から甘えたがりで、そろそろ一番お気に入りの叔父に甘え難い年齢になっているので、鶯にひっついてくるのがよくある。

「私はいいけど、猫羽ちゃん、燕雨の監視はいいの？」

「うん。わたしが言われてるのは、ツグミのガードだから」

要するに、燕雨か鶯、片方だけ確保すればいい。それでも今日のように、こっそり二人の時間を作る気はあるらしい。

十一歳ほどという猫羽は、小柄でもっと幼く見える。鶯に横向きにぴったりくっつき、うとうとしながら話を続ける。

「兄さん、まだ、迷ってるの……わたしがお邪魔虫をするの、ゲンジお父さんだけでなく、兄さんの意志でもあるよ……」

俺が困ることもある。前にそう言っていた話だとわかる。

「あのね……兄さん、ツグミの気持ち、わかってないよ……」

「……え？」

「わたしみたいに、感情の方はよく観えないの、兄さん……わたしは逆に、感覚の方はわかりにくいし……うん……」

とても頑張ったようだが、すやすやと寝付いてしまった。けれど猫羽の言葉は大体、大切でない事柄が少ない。

燕雨が鶯の気持ちをわかっていないというのは、何となく通じた。

鶯も眠りに落ちていきつつ、ふと思い出した。

いつも髪に隠れているが、今日間近で見た燕雨の耳は、昔と違い尖っていなかったこと。どうして今思い出したかは、わからなかった。



鶯の気持ち。それは正直、鶯自身ですらよくわからない。

燕雨も測りかねているのだろうか。たまに猫羽の目を盗んで、恐る恐る鶯に触れては、幸せそうにすることが増えた。

好き、とあれだけ言っていたのに、燕雨の望みで触れ合うことはためらっているのだ。けれど実際に手を伸ばしたら、鶯が拒まずほわっとするので、安心している。その繰り返し。

そんなあどけない日々が続いた。たまに黒い影達の襲撃がありつつ、鶯には何事も無い。

燕雨も眠そうにはしているが、元気に雀荘出勤している。遊んでいる、と御所では取られている節もあるが、普段が真面目なので侍者としては丁度良い。

けれどやがて、穏やかだった日常は終わりを告げる。

父が久しぶりの、黒紋付を引っ張り出した。

叔父が喪儀のための凶服をまとい、鶯と燕雨も黒衣着物で重い腰を上げる。

先に櫛が火葬場に来ていた。無縁仏を引き取るつもりだと、普段以上に赤い目をして、「たいがあきたか大雅秋荘」の遺影を持っていた。

「だから、たか荘さんよう……酒、やめろって、言っただろ……」

沈痛な面持ちの父の、隣に立つ燕雨はひたすら無言。鶯の方が泣きたいくらいだった。冷たい顔で佇む燕雨は、まるで三年前のヒト殺しに戻ったような青い目で。

いつかいい日が来る。そう笑っていた浪人の小さな喪儀。

これが鶯の鳥籠を一変させることを、櫛が遺品を持ち出した直後に、誰もが目にすることになる。

叔父がつつがなくはらえ祓を終えた後に。

遺体を焼き場に送る前に、櫛が二本の短い棒を棺に入れたい、と言ってきた。

「これ、うちに置きっ放しだったたいこぼちタカさんの太鼓桴なんだ。もうドラムを叩く体力はないから、って……」

聞き慣れない外来語に、一瞬鶯が首を傾げたその隙だった。

燕雨の視線が櫛の手元に釘付けになった。

そうして誰一人、止めることも予想もできなかった行動に燕雨は出る。

「——え？ 燕雨——君？」

櫛の手から、燕雨が浪人の形見をひったくるように取った。

項垂れていた燕雨の表情は誰にも見えず、何が起こったのかよくわからない間に、そのまま燕雨は二本の桴を握りしめて、突然場から走り出したのだった。

「えっ……ちょっと、何処に行くの!？」

まだ火葬が終わっていないので、全員が場を離れるわけにいかない。

もしかしたら、と櫛が青ざめた。それで鶯と櫛が、燕雨の後を追う役を請け負うことになった。

「燕雨君、ひょっとして、スタジオに向かったんじゃない!？」

それは何か、と櫛に問う暇もない。鶯も知らない謎の場所へ、何故燕雨が向かっていると櫛が思うのかも。

しかし、櫛の予想は正しかったことを、辿り着いた京都の楽器屋の地下で、鶯は思い知ることになる。

「嘘……燕雨……!？」

スタジオ。櫛が手掛ける店舗の一つという、地下の密室で。ここが京都だと、信じられない空間が広がっていた。

重く閉ざされた鉄の扉は防音用で、石の壁に囲まれて、西の大陸製の灯りが室内を真っ赤に照らす。自家発電装置もあるんだ、と説明をしている櫛の言葉が理解できない。

というよりは、聴き慣れない複数の叩打音に紛れて、まず耳まで届かなかった。

とにかくその謎空間で、燕雨は大小とりどりの両面太鼓と、いくつかの傘のような金属の間にある椅子に座り、先の桴を鬼のように乱れ振るっていた。

「えええええ、燕雨君って、ドラム打てるの!？」

たった一人で複雑な重高音の律動を織りなす、この国では誰も使わないような楽器。

あまりに新鮮で知らない世界に、鶯は思わず聴き惚れてしまう。

「ってというか、タカさん!? この腕前はタカさんだよね、どう考えても!」

櫛の言う通りだった。目の色を変えて、無心に桴を振るう燕雨は言葉通り、目があの浪人の茶褐色になっている。

これがおそらく、燕雨という憑依体質者を抱えた精霊族の本領発揮。燕雨がいなければ刃の妖精も、何の縁もない浪人の憑依など受け入れられない。

こうして浪人の魂<sup>ぼち</sup>を借りて、その生前最大の特技を再現することなどできない。

「……何、憑かれてるのよ……バカ……」

冷徹と言えるほど無表情で、死者の鼓動を紡ぐ彼はまさに天声の使者だった。

永過ぎた赤い時の、呪われし光の下で。

\*

## ◆4 本当の未練

雀荘で懇意にしていた常連客に、燕雨が憑かれてしまった。祓おうにも燕雨本人の意思で逃げ回り、手が打てないでいる。

「せめて、どうしたら成仏してくれるか、タカさんのことを喋ってよ、燕雨……」

あれから燕雨は一言も話さなくなった。いつまでも地下でドラムを打っていようとするので、父が気絶させて御所まで連れて帰り、軟禁状態になった。

それでも二本の桴だけは、死んでも手放そうとしない。

責任を感じて落ち込む<sup>くぬぎ</sup>櫛に対して、旧来の身内組の一人、従兄の蒼潤<sup>そうじゆん</sup>は、竹刀を振りながらあっさり言ったものだった。

「それなら打ちたいだけ打たせてやればいいだろ。もしくはもう一度、秋荘殿を晴れ舞台に立たせてやったらどうだ？」

蒼潤は剣の師かつ伯父である鶴の父に、浪人の過去をよく聴いていたという。鶴の部屋で櫛と蒼潤、三人揃って相談をするのも久しぶりだった。

「まさか、蒼ちゃん……手遊びになって、蒼ちゃんに頑張ってもらってきたベースが、ここで生きるの……？」

「ギターは櫛、ドラムは燕雨で。後は伴奏者、鶴なら何とかなるんじゃないのか」

「……はい？」

鶴は御所の貴人であるため、笛や琴なら嗜んでいる。更に蒼潤と櫛は、密かに西の大陸の楽器を学んでいたらしい。

「秋荘殿は……世界中を駆けた放浪楽団の一員だったんだ」

タカにはもっと大事なものがある。燕雨もそう言っていたことを、鶴と櫛は揃って思い出して顔を見合わせていた。

「奏者の一人が罪を犯し、楽団を続けられなくなった。凄く練度の高い楽団だったと言うし、並大抵の完成度では、成仏いただけないだろうが……」

「待って、蒼……その楽団を、まさか、私達でって……？」

夕陽色の鳥頭で、長袴姿の硬派な従兄は、毅然と真面目な黒い目で頷いたのだった。

「もう一度、演りたい。酒を飲む度にそう嘆いていたそうだ」

その内に、鶴達の話聴きつけて、猫羽や悠夜までが蒼潤の提案を後押しに入った。

「刃<sup>レン</sup>なら、ピアノ、弾けると思う……旅芸人の護衛の頃に、褒められて喜んでた夢、今でも見てるもの……」

「それならドラムのない節では、燕雨君にキーボードも担当してもらって。鶯ちゃんには、歌とキーボードをこれから、急ピッチで練習してもらおうと効率がいいんじゃないかな」

何を言っているのかも理解できない鶯を、あれよあれよと櫛がスタジオに連れ込み、楽譜の見方と基礎を教える。

一度始めると鶯も、最低限の習熟まではかじりつく性質なので、毎日朝から晩まで赤い地下室にこもった。

ちなみに燕雨は、御所で無言か寝ているかのどちらかで、櫛と蒼潤と鶯、全員揃える時だけ蒼潤が連れてきて、音合わせをする日々となる。

これが正解なのかは、誰にもわからない、としか言えない。燕雨や浪人が納得する形で、死者の憑依を終わらせる方法。

憑依とは、された者の生命力をかなり奪うため、鶯は心配で仕方がないが、猫羽は諦めるように燕雨の心を代弁していた。

「兄さんが、したくてさせてるから、無理。兄さん、タカのこと、大好きだったから……」

悠夜は父達に説明したり、ひとまず近場で西の大陸風楽団が演奏できる舞台を、手配しようと奔走してくれている。

猫羽は何度も涙を浮かべ、無表情でも声を詰まらせていた。

「ありがとう。兄さんのために、みんな頑張ってくれて……」

確かにこの事態は、燕雨が引き起こしたものとは言える。けれど鶯は、燕雨を責める気にはなれなかった。

こうやってあわあわとした時間を過ごしていると、鶯も顔なじみだった常連の亡くなった悲しみが、少しだけ紛れるのは確かだった。

唯一、鶯が、どうしても不満だったことには。

「それにしても、どうして燕雨、喋らないの？ 今あの体は、誰の意識が一番で動いているの？」

「それは……わたしも、ちょっと、微妙。刃なのか、兄さんなのか、タカなのか、入り乱れてて……」

キーボードとドラム、それらの楽器を与えると、大喜びをするように一心不乱に向かう。

しかしドラムは、演奏だけでかなり体力がいるようで、力尽きるとその場で眠ってしまう。曲目をかなり考えないと、演じ遂げるのは難しそうだった。

鶯にも全く触れなくなった燕雨は、現在、鍵盤と赤い灯りの光で生命力を補給しているという。猫羽と悠夜が、公演の詳細について、スタジオの隅で今日も話し合っている。

「舞台上でスポットライトが当たれば、刃ももっと、やる気が出てくるかも？」

「その力を何処まで、計算に入れていいかは悩みますが……どの道予算の関係上も、半時が限度でしょうね、上演は」

人見知りの強い悠夜は、この中では新顔の猫羽には未だに丁寧語で話している。それでもすっかり隠密として、影に日向に力を借りて、気の合っている子供二人に鶴には見える。

猫羽は特に、甘え相手としてお気に入りの頼也にそっくりな次男の悠夜に、無自覚に並々ならぬ思い入れが垣間見えた。

演奏の練習に専念する鶴達と、演出を考えてくれる悠夜達、回収できるかわからない費用を負担してくれる親達。最早、御所の一部で、一大新規事業になっている。

本来、人目を集める事には鶴を参加させたがらない父だが、荘さんの葬送なら仕方ない、と受け入れてくれた。さすがに世界中は無理だが、この国の中なら遠くに公演に行ってもいい許可をもらえ、楽団の命名も引き受けてくれた。

「すみれと悩みまくったが、ついに決まったぜ！ 荘さんのバンドなら、『<sup>たかすずめ</sup>荘雀』、これでどうだ！」

母と一緒に、三日三晩ほど考えたらしい。

麻雀好きの浪人について、最大の団名を贈る現役の侍大将だった。

そうして何と、僅か一カ月ほどで、彼らは初舞台を京都で披露するまでにこぎつけていた。

しかし叔父の占いでは、それでは浪人は成仏しないだろうと出ていて、実際に何とか初めての「荘雀」を演り切った後にも、燕雨は変わらず御所で寝こけている有り様だった。

「とりあえず、雀荘をしばらく任せられる人は見つけたから。本気で全国ツアーに出るしかないかなあ、これ」

自営業の榎は本来、己の商売を疎かにすることはできない。榎がそこまで頑張るなら、と鶴も、国内巡業の決意を固めた。

幼い猫羽や悠夜はさすがに、ついてこさせるわけにいかず、叔父や母にも御所の管理の役があるので、今後の一行の吉凶は鶴の術が預かることになる。浪人を成仏させる祓も、鶴が担当することになるかもしれなかった。

父は一番弟子の蒼潤に、道中の護衛を固く固く言い付ける。

「いいか、何人たりとも、鶴に手は出させないでくれ。お前だけが頼りだ、蒼潤」

「はい、幻次さん。燕雨の奴には、目が覚めても近付けないよう見守ることを遵守します」

これにて、父の部下の侍と世話役の官女数人、鶴、蒼潤、榎、燕雨の全国行脚が決まった。機材もあるため三台もの馬車を借りて、京を出たのは鶴の誕生日の前週だった。

猫羽が最後に、気を付けて、と目を潤ませていた。そこに多くの意味があったことに、旅の末に鶯は気が付く。

こんな形で、御所という鳥籠から羽ばたくことになるとは、鶯は思いもよらなかった。知らない町の小さな舞台で、「莊雀」がこの国にはない西の音楽を奏でる度に、絶賛の声上がる。

「大きな方向性としては、間違っていないはずなんだけど……タカさんはどうして、まだ未練の色が強く出るのかしら」

馬車の中でふるふると首を振り、子供のようにいやいやをする燕雨を前に、何度目かの占い結果に鶯は溜め息をつく。

歌い慣れているわけではない鶯が、喉を潰さず旅を行けるように、櫛が持ってきてくれた苦い薬を今日も呑み込む。

「でもこの季節が、やっぱり辛いわね……雪で通れない道もあるし、今日も野営だし……」

馬車にはそれぞれ、できるだけ防寒具を用意し、あまり冷え込みがきつければ、鶯が暖をとる呪いまじなを加えている。

舞台と旅の疲れが込んで、鶯の体調もあまり良くない。今日は自分の誕生日だったが、思い出す元気もなかった。

官女達と鶯が乗る馬車に戻ると、早目に休もう、と毛布にくるまった。機材を積む馬車には、櫛と蒼潤と燕雨が乗る。

鶯達の馬車を前後で囲み、後ろには侍達の馬車がある中で、数時間後、とんとん、と、思わぬ来訪者が来ることになった。鶯が丁度横になる近くの、幌の外側を的確に叩いて。

気配に気づき、目の覚めた鶴が、侍女達を起こさないよう外に出ると。  
見張りの馭者にしーっと口止めをする、蒼潤が馬車の横に木刀を持って立っていた。  
「鶴。燕雨がさっき、起き出して逃げた。放っといていいか？」  
「えっ!? い、いいわけないし、そんなの……！」  
「じゃあ追いかけるよ。おれは今夜の見張り当番だし、他の奴らじゃ、アイツを連れ戻すのは無理だろ」  
「えっ……でも……いいの？」  
鶴に誰か、特に燕雨を近付けさせるな。それを遵守する、と言った従兄なのに、珍しくいたずらっぽい顔で笑った。  
「燕雨を近付けさせないとは誓った。でも、鶴が近付くのは別に自由だろ」  
更に言えば、見守るとしか言ってない、と。  
よく考えれば、昔から誰より燕雨の味方である兄弟子に、鶴は久しぶりに、安心が込み上げて心から笑った。  
「ありがとう、蒼。みんなには内緒にしてね！」

燕雨の気配を追って、鶴は街道から逸れた森に入った。  
木々の間をちらほらと、小さな雪があちこちに舞っている。さすがに危ないとわかっているのか、燕雨も森の奥に行くのではなく、来る道で見た「展望台」の標識の方へ向かっている。  
やがて、谷川と向かいの山空が見える休憩所に着き、先に着いていた燕雨が背中を向けて、夜空を見上げていた。  
「……燕雨？」  
何となくだが、鶴には、そこにいるのは燕雨。その確信があった。  
道中では全員が使う夜着の、足元を引き締める袴と黒い小袖で、静かに振り返った青年は蒼い目で微笑んでいる。  
「……目が、覚めたの？」

浪人に憑依された状態になり、まるで子供返りしたような奔放さになっていた青年。  
勝手に一人でこんな所に来るのも相当我が侘だが、それは半分、浪人のためであると、静かに口を開いた燕雨から感じ取れる。  
「……目は、ずっと覚めてる。ただ、タカが喋れないから、何も言いたくなかっただけで」

ためらいながらも、鶴と二人きりになったので、ようやく話すことができる、という空気。

鶴は何よりもまず、最初にきいておかなければいけない。

「タカさんは……どうして、まだ留まっているの？」

喋られない、ということは、ほとんど意志の残りも乏しい死者であるはず。

元々憑依とは、余程強い未練を持った死霊、それも生前からかなりの意志力を持つことが前提になる。

燕雨は向かいの山並みを背に、悲しげに両目を伏せた。

「タカのいい日が、まだ来ないんだ……みんなにタカも感謝してるけど、その日が何なのかは、俺にも教えてくれない」

おれにはいつか、いい日が来るんだよ。いつも浴びるほど酒に浸りながら、自分にそう言い聞かせていた浪人。

「いい日って……何？ 俺には多分、今日がそうなんだけど」

逆に問うてきた燕雨に、鶴もううん、と考え込んでしまう。

「今日は、アナタには、いい日なの？」

「うん。だって、鶴が生まれて来てくれた日だろ」

はっ。すっかり意識になかった誕生日に、鶴の顔が激しく熱くなった。

まさか燕雨が、それを想ってここに来たのなら、我が侘な行動の理由に思い当たってしまう。

でも、と燕雨が、自分で言いながら「いい日」に苦笑った。

「でも俺は、『いい日』なんて、信じたことはなかったから。だからタカが、何を待ってるかが、さっぱりわからないんだ」

「……燕雨……」

それから燕雨は、あえて鶴にもう一度背を向け、展望台の柵から身を乗り出すように話を続けた。

「ずっと……未来はいつも、怖いことしか待ってなかった」

「……」

「今だって、怖いよ……だって俺は、戦うしかないヒト殺しだから。いつまた、猫羽がもう一度……鶴も、幻次も、榎も潤も……いつか、俺の前から、いなくなるのかって」

夜に融けている青年。そこにいるのは、大昔の自然の化生。

失った妹を助けるためだけに、彼は長い時を待ったという。けれどそれも、助けられる確証もなく、助けると思うことで辛うじて自らを繋いだ、苦しい旅で。

「猫羽が帰ってきた日。鶴が生まれてくれた日。きっと凄く、良かった日。でもそれは、いつかどっちも、失うことで」



彼にとって、未来は失うだけのもの。

だからきっと、鶇に触れたいと願いながら、妖精の体を奪わない青年がいる。

「だから……アナタは、認めたくないのね」

既に刃の体は、妖精の形——尖っているはずの耳も、羽も失くして、大半が燕雨仕様の姿となっている。

髪の色が金で、目の色が蒼であることが、まだ燕雨に変わっていない部分。本当の姿は銀色の髪で、青い目であるのが燕雨なのだから。

「もう、その体は、とっくにアナタのものなのに……たとえそれは、タカさんが憑依しても、変えられないことなのに」

「……」

刃の体だから、鶇に何もしない、と燕雨は言った。つまり、燕雨として生きる決意をし切れていない。悩んでる間くらい体も持つ、とその言葉通りに、悩み続けている。

それなら、それがこたえ、と。目前の青年に憑依している浪人にも、鶇は哀しいばかりの思いを馳せる。

「……タカさんも多分、アナタと同じ。未練はあっても……希望はなかったのね」

いつかきっと、いい日が来ると。

そんな戯言を、信じてはいないから簡単に口にした。鶇の言葉に、燕雨が両肩を一瞬震わせていた。

「似た者同士。だから、引き寄せられた。この旅も、ずっと続けられることじゃないって、タカさんはわかってる」

おそらく今、燕雨の体を借りて、さまよえる浪人は楽団を全力で楽しんでいる。

鶇と共に過ごしている束の間を、常に大切にしてきた燕雨と同じように。

そうなるとこの現状の、理由は一つだとわかってしまう。

「……そっか。じゃあ、タカを引き止めてるのは、俺か」

「……………」

今度は鶇が泣きたくなった。

両手をぎゅっと握りしめて、奥歯を噛み締めて表情が変わるのを堪える。

いつか失うことが怖い、と、あれだけ言った燕雨なのだ。仲良くなった客が死んでしまったことに、どれだけ大きく、痛みを抱えているのだろうか。

「タカを助けられる方法は……あったのかな……」

本当に死ぬ、と燕雨は何度も浪人に言った。それだけでは酒の一つもやめさせられなかった。

夜空に吸い込まれそうな燕雨があまりに拙く、鶇はそっと近寄っていくと、あくまで振り返らない背中を、後ろから静かに抱き締めていた。

「……——」

未来に何も、希望を持ってない。失うことばかりを、何度も繰り返してきたために。もう二度と奪われたくないあまり、ヒト殺しとして、奪う側に回った青年のように。

そんな相手に、どんな声をかけられるだろう。いずれ必ず、鶯も死ぬのだから、「そばにいる」など気休めにもならない。

「私も……アナタが帰ってくると、思っただけじゃなかった」

一つだけ鶯にも、深く共感できることがある。三年前に、この相手が死んだと聞いた後に、どんな気持ちでここまでの時間を過ごしてきたかは。

「それでも、待つ、って……叶うと思っただけじゃなく、私も待ってた」

「待つ」。それは本来、いつか叶うと信じる希望そのもの。おれにはいい日が向こうから来ると、無責任な望みですらも。

「何を待つのかは、正直、わかってなかった。そう思わないと、いつものように顔を上げて、当たり前のように暮らせなかった」

「……」

燕雨が本当に、銀色の髪の子供である頃。両親も友達も、妹も全て、理不尽に奪われたと何処かできいた。

それ程酷い慟哭を知らなくても、明日が今日と同じでない怖れだけは、鶯にも目の前に感じられる現実だ。

説教をしたいわけではない。伝えたいことは全て言えて、後は強く抱き着く腕に想いを込めた。燕雨の冷たい体が少しでも、温まればいいのに、と願いながら。

それから燕雨は、何も答えず「帰ろう」と言った。

馬車に戻る道すがら、手を繋ぎながら鶯を見ずに尋ねてきたが。

「……鶯、誕生日だろ。何か欲しいものはある？」

「え？ 特になんかなくて……道中の無事くらい？」

普通に喋るようになった燕雨は、野営地に戻っても「勝手にごめん」と蒼潤達に謝っていた。ドラムは打てるので、憑依が解けたわけではないが、多少は軽快したと言える。

一カ月ぶりに喋れた燕雨に、愛の力は凄い……と感動する欄に、バカ、と返すしかない「莊雀」の歌姫だった。

燕雨が喋るように戻ってから、次の上演先に向かうまでに、かなり長く馬車にこもる時間があった。

今回の巡業で最大の舞台に行くため、ミーティングをしようよ！ と榎が提案し、機材の馬車に舞台の面子で集まり、狭苦しく揺られていた。

「心配なのは、凄く広い舞台だから、後ろの席まで鶴ちゃんの歌が届くかどうかなんだ。バンドの物珍しさだけでも感激してもらえとは思うけど、せっかくキレイな歌声だしさ」

「これ以上無理すると、鶴の声がもたないよ。今でもかなり、きつくなってきてるだろ、鶴」

こと他者の状態把握に関して、燕雨の直観の右に出る者はなかなかいない。鶴も残念ながら、うん、と頷く。

「毎日発声練習はしてるけど、生まれ持ったものはすぐには、強くなってくれないみたい」

そもそも、一カ月弱でキーボードを弾きこなしている鶴が異常だ、と蒼潤がつつこみを入れてくる。

「いい加減、鶴は根を詰め過ぎだ。しばらく歌ありは最初と最後の曲だけにして、間はおれ達で何とか頑張らないか」

「でもそれじゃ、飽きられそうじゃないかな……バンドってかっこいいけど、どうしても僕達のレベルじゃ、複雑過ぎる曲は弾きこなせないからさ？」

元々趣味でやっていた榎と蒼潤は非凡であるが、舞台向けの曲を覚えたのはここ一カ月だ。一朝一夕に幅は広げられず、数日ある公演では同じ曲を何度も繰り返すことになる。

あのさ、と。浪人の桴を握りしめながら、ためらいがちに燕雨が、機材から小さな太鼓を一つ取り出していた。

「できるかどうか……確信は、ないけど……」

「？」と全員が注目する前で。

すう、と燕雨は息を吸うと。足元に置いた太鼓で速さを測りながら、単純な打音と共に、何と即興でその場で歌い始めていた。

「って……えええっ……！」

隣にいた櫛が面食らっている。蒼潤はほう、と感心の顔で燕雨を見つめ、向かいの鶴は茫然とする。

太鼓を打つ手並みは浪人であるのに、喉から上は別人のように澄んだ声を紡ぐ。

ああ、いつか、いい日があるさ。知っているんだ、いつか——

そんな、誰かの心をそのまま映したような短い歌声が、馬車の音にも負けずに全員に届いていた。

「うそー……燕雨君、僕、泣いちゃったんだけど……」

途中からぼろぼろと、相好を崩した櫛がギターを取り出す。ドラム少な目のやつ！と、別種の持ち歌を弾き始めていた。

「これ、いける、鶴ちゃんは最初とトリを飾ってもらえる！ 間を今から急いで練習しようよ、燕雨君は適当に歌をつけて、蒼ちゃんは僕に合わせてくれたらいいから！」

よし、と盛り上がった場。それは良かったことだが……。

鶴は何故か、櫛達とは別の次元で、深い衝撃に襲われた気がした。

「……アナタ……『声』……——」

何か、そこで、大事なことがわかったような。

心の底から、理由もなく込み上げる喜びに、鶴自身が戸惑うのだった。

銀色の髪の時雨と、金色の髪の子雨。三年前の少年達が、同じでありながら違った部分は、ごく僅かだった。

金色の髪の子雨は、時雨が言葉にできない思いを言えた——「声」にすることができる者だったのだ。それが何の意味を持つか、思い出せないまま鶴は次の公演先についた。

妙な音の通り。という地にある今回の最大の舞台は、古くは闘技場だったらしい。中央の円形の舞台を囲み、東西南に、沢山の座席が階段上に広がっている建物だった。

「北だけは楽屋や音響室で、五階と屋上まであるんだって。僕達は四階から上を自由に使っていいみたいだよ！」

これから一週間、「雀荘」はこの屋内で寝泊りできる。体力回復にも丁度良さそう、と鶴はほっとしていた。

明晩からの本番に向け、早速とばかりに機材を舞台に広げ、音合わせを始めようとした矢先のことだった。

まだ観客が入れるはずのない、空っぽのはずの南側から、妙にゆるりとした声が舞台の方に近付いてきた。

「おお～。うちの近くでも演るって言うから、試しに覗きに来てみたらばよ……すげえじゃん、本格的じゃん、しっかりバンドやってるんじゃん、紫雨～」

ドラムを運び終わった燕雨が、ぼかん、と侵入者を見る。

「<sup>けい</sup>炯……？」

鶯達にもそれは、見覚えのある男だ。鬱金色の髪で、襟を立てた異国の上着を好む、「<sup>かすが</sup>春日炯」という燕雨の親戚。

正確には、鶯に椋時雨の危うさ、「銀」となるには生命力を削ると、かつて教えてくれた男が訪ねてきたようだった。

燕雨の養母の従兄にあたるが、普段は遠い地で住むという炯。燕雨を「紫雨」と呼ぶ男に、鶯は何故か不安を覚えた。

「もし時間あれば、何処かで喋ろーぜ、紫雨。忙しそうだし、今日は邪魔せずにさっさと帰るかなあ」

「うん、炯。<sup>アキ</sup>鴉夜にも、俺は元気だって言っておいて」

アヤ。カラスの名を持つ、炯の連れ合い。黒づくめの姿で、少しだけ鶯は同じ一座にいたことがある。本質は人間でも黒い悪意の翼を抱え、秩序の管理を背負った少女。

理由もわからず、立て続けに眩暈のような悪感が鶯を襲う。蒼潤が不審に思ったように、声をかけてくれた。

「鶯、大丈夫か？ 今日ほもう、無理をせずに休んでおけ」

明日の昼から音合わせで充分だよ、と鶯も賛成する。まだ彼らは新曲の調整をしているが、言葉に甘えさせてもらった。

一人で先に、女性用の楽屋の座敷で寝付いて。夜中に燕雨が、炯を探してこの古都の何処かで、古い木造の橋を渡っている夢を鶯は見た。

そしてその先で会った炯が、大きな黒い影を背負い、「時雨」に変貌するまでの悪夢を。

気が付けば鶯は、燕雨を探して、暗闇を必死に走っていた。

「ようこそ、山科鶯……『天龍』へ」

そこにいたのは、猫羽だった。真っ暗な黒い闇の底で。

\*

## ◆ 5 燕雀は鴻鵠の志を



燕雨が初めて、花の御所に現れた夜。黒い影だった時雨の更に影から、御所に転位できたのは猫羽のおかげだ、と彼は語っていた。

影を渡った力自体は翼の悪魔の助力だが、まず鶯が危ないと知ったのは、猫羽の警告があったからだ、と。

けれどそれは、天の国にいたはずの燕雨と、地上の猫羽は何処で話したのだろうか。

「.....そう、正解。山科燕雨が会った、と思ってる猫羽は、この闇にいる私のこと。時雨が貴女を狙ってるって、燕雨にここで教えたのは私.....橘桃花<sup>トウカ</sup>」

猫羽と同じ顔なのに、口調と髪型、そして薄手の異国の服であるのが違う黒い娘。鶯と同じくらい短く切っている髪。

「貴女が全て、気付いた通りよ。貴女は自覚するのが、少し下手みたいだけど.....」

橘桃花と名乗った娘は膝をつくと、闇中に座り込んでいた鶴と、真っ黒な目で視線を合わせてきた。

「燕雨を地上に降ろすために、黒い影を放ったのは炯だし。その影は鴉夜の力……椴時雨に渡されるはずだった『悪神』の黒い翼が、貴女をこの『天龍』の船底へ誘い込んだ」  
語られる言葉は、黒い娘の言う通りに、鶴が実際に感じていた悪い予感だ。

けれど自覚できなかったのは、それは——鶴が気付いてはいけない、夢の出口だからで。

「望んだのは、貴女でしょう？ ……山科鶴」

猫羽と同じとは思えない冷ややかな声。けれども憐れみが宿る黒い目には、見たこともないほど弱気な鶴が映っている。

どうしてここに来てしまったのか。ついに現れた炯のことが気になって、無意識に夢枕で占いを立ててしまったのだ。でなければ鶴は、夢見で何かを覗ける能力はない。

「そう。貴女が会いたくなかったのは、炯」

じり、と黒い娘が、一歩近付く。鶴は思わず座ったままで後ずさって、背後にあった何かに手がぶつかって止まる。

「この、『有り得なかった夢』を、終わらせられる一人が炯。貴女が本当は知っていた、本来の世界では生きていない悪魔。けれどその世界には燕雨がない……だから貴女は、自分に嘘をついてでも、『有り得なかった夢』に留まることを望んだ」

やめて、と。いくら占っても、存在しないと出たシグレ。その結果はおかしい、と知っていた鶴の弱音が零れる。

「この夢には、時雨の方が存在しない。なのに貴女は、ここにいない時雨を呼んだ。夢だとわかれば、夢を壊してしまう危険があるのに……燕雨がいつまでも現れないから、時雨に会いたい、そう望んでしまったから」

三年という、短くはない時の中で。揺れ動いていたのは、いったい誰だったのか。

「『待っているから』。それが本来の貴女の約束。けれど……」

かみよ  
神代の混沌。剥き出しの真実に浸かる黒い夜の娘の忠告。そうわかりながら、泣き出す胸は目を逸らしてしまった。

振り向いた先には、黒い娘よりも冷たい現実が在るのに。

暗闇に後ずさろうとした時、鶴の行く末を阻んだ何かが、あちこちに転がっているのが振り返って見えた。

ここから先に、逃げる場所などありはしないと。黒い床を埋め尽くしているのは、全て——「本来の鶴」だ。

「あ……あ——……」

若い乙女だけでなく、女から老婆まで、様々な鶯が辺りに山と寝かされていた。それらは全て、ここではないどこかで一人息絶えた、「時雨を待ち続けた鶯」。

この地獄を見てしまった鶯に、後ろから静かな声が響いた。  
「待っているだけなら、貴女はこうなる。生きている時雨に会えずに、ずっと一人で……貴女は、ここを知ってしまったから、『有り得なかった夢』を望んだ稀な鶯」

淡々と、事実を伝えるだけの声。鶯は涙が溢れ出してきた。  
連れていって、そう燕雨に望んだ鶯は、この闇に眠る全ての鶯がきつと訴えていたから。この「今」を招いたのは鶯と、最初から知っていたのだから。

闇夜にかぼそく隠れる昏い雨雲。「天龍」という、古の技術で造られた絡繰大蛇。それが三年前に時雨を奪うのが、夢の外の現実だった。

けれど時雨はその世界を、自らの存在ごと消した……燕雨が世に降りる「夢」を見せるために。

今、鶯が辿り着いた「天龍」にはいるはずだった。最早、存在ごと消されてしまった少年が。様々な自分の死体という、地獄の悲鳴を呑み込みながら、鶯は暗闇の底で立ち上がった。

いずことも知れぬ場所を望み、足が勝手に走り出した。その心を支える力の一つ。

——……アナタ……『声』……。

黒い翼を生やした時雨——銀色の髪をした紫雨は、決して消えていない。  
いつかいい日が来るさ、と。時雨に代わって「声」を出せる、紫雨の歌を確かに聴いた。

夢だけでは終わらせない。それでなければ、この「鶯」がここにいる意味がない。  
歯を食いしばって走った鶯の前に、やがてその、黒い翼の少年は哀しげに降り立っていた。

「何処へ行くの？ ……ツグミ」

花の御所で現れた、黒い翼を纏う少年。それを時雨と固定したのは鶯。  
そうしなければ、出会うことはなかった少年が、微笑みながら一筋の涙を落した。  
「どうしてこんな所に来たの？ オレはもう、会えることはないと思ってたのに」  
少年にとっては、あの一度がやっとの再会で最後の逢瀬。  
鶯に黒い影を送り続けていても、それが時雨の形を取れることはもうなかったのだから。



鶇は、ここで出会えた少年に、最大の心を伝える。  
「.....時雨。.....アナタはちゃんと、アナタの世界に帰って」  
そんなことを、言いに来たの？  
そう言いたげに、少年は、これまでの伶俐さが嘘のようにぎこちなく微笑む。  
「それは.....無理だよ」  
そうしてとても幸せそうな声が、拙い希みを全て拒絶した。  
「だって.....オレは多分、あんたと一緒にいたかったんだ」  
同じ御所で暮らしていた頃、何度も笑顔で示された想い。全てを「声」にした少年に、鶇は絞り出すように答える。  
「それは.....アナタの世界の私に.....ちゃんと、伝えて」

この少年と、出会ってはいけなかった。わかっていながらここまで来てしまった鶇は、全身全霊の真心で応える。  
「.....待っているから。どこにいても私は.....アナタのこと」  
そこは鶇の在る世ではない。「時雨」が残る世界にこの鶇はいない。  
それでも伝えたかった。人世の光と無縁の船底で、時の闇を渡る少年を待ち続ける、「鶇達」の想いを。

真っ黒な沼の中を進むように、黒い影がまとわりつく暗い船底を走ってきた。  
この影がそもそも、鶇を旅先からここに運んだのだろうか。歴史のある古い舞台に泊まっていたので、人世の外への道が繋がりが易かったのかもしれない。  
僅かの間、俯いていた少年がそれからどうしたのか、鶇はもうわからなかった。  
意識が全て黒い影に堕ちた。こんなに真っ黒な異界で、黒い娘や少年は世の行く末を観ているのだ。

何も見えない。冷たく暗い闇に囚われてしまった。普通はこういう無動の虚無を、きつと「死」という。  
けれど耳を研ぎ澄ませたら、闇の何処かに雨音が聴こえた。  
それと同時に、脳裏には何故か、晴れた空が広がり始めた。

その雨音混じりの青い空は、確か「荘雀」の初舞台だった。野外の会場だったので雨が降らないか心配で、雨男の燕雨を封印しよう、なんて冗談が飛び交ったくらいだ。  
むしろ、燕雨がいた方が多少の雨で天気になると、誰かが言っていた気がする。それはどうしてだっただろう。

気持ちいいほどの青い空と、きらきりと光を弾いてくれた雨滴。  
あの時空を仰いだ鶯に、白い翼を広げる誰かが笑った。

——『天気雨』を持っていて、『シグレ』くんを残すために。

せっかく地元で初舞台なのに、燕雨の家族は猫羽しか観に来られなかった。残念に思っていた鶯に、白い翼が伝える。

——あなたには無理よ。でも——あなたにしか無理よ。

やがて初舞台が終わり、すっきり晴れた空の下で、燕雨が鶯の両頬を包んで笑った。  
「大丈夫」。そんな笑顔で。



「鶇.....!!」

飛び立とうとした空から引き戻された。鶇もあの白い翼を受け取れる、そうわかる寸前に暗闇が戻ってきた。目を開けても真っ暗で、体も何も感じないのに、青い声がするから気付けた。燕雨が鶇を抱き締めて、座り込んでいる。

「.....燕雨？」

「鶇.....俺が、わかる？」

鶇に何も見えていないのを、さすがの直観でわかるらしい。

どうして声以外わからないかは謎だが、鶇も靈感での羽先を伸ばすと、馴染みの剣を背負った燕雨が、ぼろぼろに疲れた様子で、鶇を守るように横抱きをしているのが感じ取れた。

「燕雨.....時雨と、戦ったの？」

自分の手が何処かわからないので、燕雨の泣きそうな顔を撫でてやれない。これは相当不便だと気付く。

「うん。大元もわかったから、もう出て来ないよ。ごめん、鶇をこんな所にまで巻き込んで.....」

それじゃあ、と鶇は、悪い予感の正しさを知る。

「炯が変なのは一目でわかった。猫羽がまさか、鶇をここに呼ぶとは思わなかったけど.....」

でも、鶇をすぐ返してくれたからいい、と。黒い娘のことだけは、かぼうように付け加えた燕雨だった。

「燕雨.....あの猫羽ちゃんは.....」

「.....ああ。俺も最初、天国で会った時は変だと思ったんだ。帰れないから送って、って言うから、俺もこの船がどの空にあるか、知ることができたんだけど」

どうやら燕雨は、時雨と戦っただけでなく、地上からこの暗闇まで飛んできたらしい。なるほどそれは、背負う剣を、普段の腕輪に戻せないほど疲れるわけだ。

つばめと名の付くくらいなので、翼の悪魔や他の縁者から受けた、いくつもの翼がある彼なのだ。

「あいつ、猫羽以外に、何て呼んでいいかわからないから、猫羽って言ってるだけなんだけど」

がっくり、と鶇に一気に平和な気分が戻ってきた。橘桃花の名を教えようか悩んだが、興味もなさそうなのでやめる。

たとえそれが、猫羽をこの世に戻した依り代だと、鶯の靈感では視えていても。

くいつと、燕雨が懐から緊急用の酒筒を取り出し、中身を苦しそうに嚙下するのが靈感で伝わってきた。

「朝までに何とか戻らないと、みんな大騒ぎだ。俺はいないし、鶯は目を覚まさないって」「——？」

「鶯が来てるのは心だけだよ。神隠し、って多分これだ」

それで今、闇の中で感覚がなくなっているらしい。

先刻に黒い娘や時雨がはっきり見えたのは、向こうが完全に常夜の者であるからだろう。燕雨の「声」もそれらに近い。

心だけというわりに、燕雨が鶯を抱えられるのは不思議だ。そういう場所なのだと思うしかない。

「でもこれ……帰れるの？」

「帰るよ。こんな所に鶯を長居させられない」

そうは言っても、燕雨はまだ立ち上がりもできなさそう。心だけの鶯は重くはないだろうが、燕雨の心身も限界なのが感じられる。この状態では無理をしても、燕雨が夜の舞台に立つことが難しくなる。

「……ねえ。私にはアナタが見えないけど、アナタには私は見えているの？」

ふっと、その不思議に思い当たった。

心だけ、というのは心霊に近いが、靈感でも心を見る霊視は難度が高い。

「見えてる。こういう時のために、ミサキの眼を着けてた」

どうやらたまに着ける黒牙の首輪のことだ。神隠し対策を燕雨は様々な方向でしていたのだと、鶯も感心してしまう。

けれどそこまで色々考えていても、燕雨自身の余力だけは、どうにもならない事柄だったのだろうか。

三年前には既に、命が残り少なかったという彼。

「……どうして……」

「——ん？」

「どうして……アナタは、生きているの」

彼の実情を耳にしてから、鶯は何度も頭を悩ませていた。

命少ない自然霊が、妖精の特性で生をつなぐ、それは何かがおかしいのだと。

「三年前に、その体……刃が死んだのなら、魔物でもないアナタは生きられない。でも、魔物であるなら、もう妖精の特性なんて必要ない」

死した者は、生き返ることはない。その原則は、魔性の者以外の全てに有効だ。自然の化生、精霊族も例外ではない。

「死んだ刃に、アナタを再現する力はない。今、アナタを、本当に動かしているのは——何？」

考えなければいけなかった。燕雨を地上に戻す方法を。

鶇だけなら、多少迷いはするだろうが、帰ることはできる。それは鶇が活着しているからだ。燕雨は心配してくれているが、生きて体と心の繋がりはその簡単に切れたりしない。けれど大丈夫と言え、疲労困憊の燕雨がここに残ってしまう。

どんな顔をしたかはわからないが尋ねた鶇に、燕雨は少し観念したように、苦笑う気配を見せた。

「……うん。鶇の言う通りだ」

刃は死んでいる。逆に、死していなければこんなにも体は弱っていない。三年前に大怪我をしていても、治れば普通の化け物に戻っていたらろう。

「刃の力を使うために、刃のやる気は必要だけど。体はもう妖精じゃない……ここにいるのは、『雨燕<sup>あまつばめ</sup>』っていう魔物」

正確には魔剣かな、と。背中の中を取り出して横に置くと、鶇にも心なしか、剣の様子が伝わり易くなっていた。

「三年前に、この剣は折られた。その時に俺も消えるはずで……でも、母さんから渡された『天気雨』が、オレを留めた」

「魔剣」。長めの刀身は青銀の両刃で、軸の黒い石が治水の神性を秘める。黒い柄の中央には力ある宝玉を埋め、補助とできる古代の宝剣。

そこに埋めた「狐火玉」が、「天気雨」の意を持ち——燕雨の祖母の形見であるのだという。

「そしてシアが、シアの翼を奪った俺を起こした。シアは、俺の剣を直させて、シアが持つてる宝の欠片で『天気雨』をこじあけた。それから雨燕を維持するのは『天気雨』で……体はそれで何とかなるんだけど、俺の意識だけが、まだ力が足りなくて」

それなら何故、燕雨は鶇にそこまで説明しなかったのか。懐から再び酒筒を取り出し、自嘲するように呷る。

「オレは『魔』だけど、俺は違う。オレはずっと、鶇を全部欲しがっていて……俺は、それは嫌だって、抵抗してる」

「魔」。それは、他者を糧とし生きるものの総称。

どんな意味かはわからないが、燕雨には鶇が糧となる、そういうことだ。

鶇は呪いという業の術者として知っている。多くのヒトは、ヒトとの間に呪いを生じる。相手の不幸や、時に蘇生を願うその禁忌は、ヒトごと奪う「魔」の一手手前だ。

ヒトが生きるには、生命力を必要とする。本来、生命力は、世界と繋がる自身が満たすものだ。

心を満たすものは、力。

体を満たすものは、命。

そして意識の火をともしのが、「生」。

「……俺は……鵜だけを糧にするオレには、なりたくない」

自身だけで満たせない生命を、最も手っ取り早く潤す方法。それが「魔」や呪い——他者への渴望なのは鵜にもわかる。

遠い日にその少年は、空の下を往く黒い鳥の剣となった。剣は赤い猫の鈴を運び、古の音色を現うつに呼び戻した。

では今、地上を往く赤い鳥の前で、錆びゆく剣は何を望むのだろう。そんな霊視が鵜に滑り落ちてきていた。

「……でも、他に欲しいものも特にならさ。今は正直、鵜が危ないならって、それだけが俺のやる気」

とにかく鵜を無事に、地上に戻すまでは。そう言われると、余計にその後が怖くなってしまふ。もう時雨も現れないなら、燕雨が意識を繋ぐ理由がなくなるはずだ。

「そっか……だから私、ずっと不安だったんだ」

黒い影が減り、安心しかけていた日常で燕雨は憑依された。それは「やる気」に大いに左右された結果なのだ。

「アナタ、私以外に糧を見つけたらそっちに行っちゃうんだ」

——え。燕雨が放心したように声が止まる。

「生きられるのにいてくれないなら、そういうことでしょ」

「え……でも……」

「知らない。でもアナタには生きてほしいから、ちょっと貸して、その『天気雨』」

手を差し出せたかはわからないが、素直な気持ちで言う。

燕雨はこれまでで一番困った顔で、剣の宝玉を外していた。

「アナタを変えるの、私には無理よ。でも……——」

頑固者。心から怒りつつ、渡されたはずの狐火玉を握る。

「そういうことなら、アナタの力にはなれる」

鵜のは、ずっとキレイな赤。

天上の聖火とされる赤を髪に持つ鵜は、固体の自然界を司る「地」の家系の青光と、自身は「水」を御せる黒の目を持つ。

狐の縁はないため狐火玉を完全に解くことはできないが、固定している陽ひと天の涙——天気雨という複雑な「力」を増幅する自信はあった。

鵜には昔から、特技がなかった。

武では蒼潤に、呪術では悠夜に、生活力では櫛には敵わない。可愛い姫にはなれず、鳥としても大きな白い翼は望むべくもない。

できることは何でもやってみたのだ。ある程度なら何事も一応できた。戦う力を最も磨いてきたが、所詮人間。

そんな自分に、もしも意味があるとすれば――

「こんなめんどくさいこと、私にしか無理よ！」

燕雨を癒しながら宛もなく地上に飛び立ち、慌てた燕雨に追いかける。

そうして元いる人世へ戻った二人だった。



天気雨を強化した影響か、帰路の途中から晴れ間に出て、ふらふら青空をさまようことになった。最終的に帰れたのは、燕雨を呼ぶ浪人の桴の音が聴こえてきたからだ。

目が覚めたら体が酷く疲れていた。初日に鶯は、最後の曲しか歌えなかった。その分燕雨に沢山歌わせ、燕雨はドラムと歌を同時進行という離れ業を見せた。そんな無茶な舞台を千秋楽まで続けたため、劇場関係者と打ち上げの後に燕雨が倒れ、舞台はないがもう一週間、同じ町の宿に滞在することにした一行だった。

三台もの馬車の一行が、一週間分の旅費を無駄に使うのは駄目だ、と燕雨は何度も起き上がろうとした。その度鶯は、バカ！ と怒って布団に追い返した。「父上の悪い真似をしちゃ駄目！ 父上とアナタじゃ、そもそも頑丈さが違うんだから、体調が悪い日はちゃんと休む！」

一番大きな舞台だけあり、数日の舞台でも今までの赤字を埋めるほどの収益が上がった。

確かに旅費でまた赤字だが、それはこれから稼げばいいのだ。

休みをしっかりと満喫している櫛と蒼潤が、観光した所から今日も美味しいお土産を買ってきてくれた。

「ついでに次の公演先も、目星つけてきたよー。鶯ちゃんはこのまま心置きなく、燕雨君の看病しててね！」

「ありがとう、良かった。お疲れ、二人共！」

ありがたくご当地物の、味噌の惣菜をふんだんに使われた小さな重箱を受け取る。一つあれば一日分は充分間に合い、お茶だけ淹れれば宿で燕雨の介抱ができる。

喜ぶ鶯に、何故か部屋に帰らずに振り返った櫛が、呆然とした顔で両目をうるうると見開いていた。

「……？」

「いや……鶯ちゃんが、笑ってる……良かったなって……」

「え……そうだっけ？」



そうだよ！ と櫛が鶯の両手を取って泣き出してしまった。  
ツンデレもいいけど、やっぱり笑顔が一番だよ！ と、解読不可能なことをわんわんと騒いでいる。

「あ、町で寄った診療所で、僕達のライブに来てみたって女の子がいたよ！ 西の大陸からわざわざこんな所まで薬を買いにきてるんだって？ 珍しい瑠璃色の長い髪でね、多分僕達と同年代の子じゃないかなあ」

「そうなの？ いいわね、薬の件も相談に乗ってあげたら？ 櫛の薬、通販もやってるでしょ。今後、送ってあげられない？」

あ、そうだね！ と、本業は薬師が両目を煌めかせた。  
「戻って連絡先きいてくるね！ まだいるといいな！」

ぐしぐしと顔を拭いしつつ、元気に宿を走り出て行った櫛。  
鶯も不意に、もらい泣きをしそうになった。  
「.....ううん。かっこわるいけど.....いいか」

夢というものは、あざといほどに都合が良く進むものだ。  
今度は櫛に黒い影が見えた気がして、静かに一人で笑った。

燕雨と櫛と蒼潤は同じ部屋だが、夜が更けるまで燕雨以外、侍達の部屋で毎晩遊んでいる。鶯と燕雨を二人にしてくれる気遣いだろう。

しかし今日は炯の見舞いがあり、鶯に「何か危険事に逢わせたいので、勘弁！」と謝ってきた。

炯曰く、燕雨に会いに<sup>うつき</sup>榎家の養父母が帰るために、仕事を大量に引き継ぎ中とのことで、黒い影は連れ合いの勧めで、燕雨の様子を見に行かせたつもりらしい。

「オレもこれから榎になるし、こっちの訪問は今日が初日」

その辺りは追及しないことにした。

燕雨も、早く帰って、と遠慮なく炯に言う。この町がご近所なのは確からしい。

「アナタは挨拶しなくていいの？ 春日さんと橘さん家」

「いい。どうせすぐ会うし、俺は鶯とここにいたい」

療養中、基本寝台にもたれて座り込んでいる燕雨は、何か心の枷が外れたようだった。毎日遠慮なく鶯を口説いてくる。

「全く。早く元気になって、燕雨も一緒に観光行かない？」

「無理。俺は鶯に、近付いちゃダメなんだから。それに早く治らないと、旅費だってかさむ一方だろ」

真面目なことを言いながら、現在二人は、寝台の奥に座る鶯が燕雨に膝枕をしている。鶯に向かって横向きに寝ている燕雨は、手を握ると嬉しそうに両手で包み返してくる。

こうして、鶇を自ずと宿に閉じ込めている彼は、御所とは違う形の新たな鳥籠なのだった。

「雨がずっと降ってたら、鶇も何処にも飛んでいけないのに」

鶇は子供の頃から、空が泣くという雨の音が好きだった。燕雨は大昔から、空から降りた鳥が好きだという。

それなら今後は、銀色の雨で青く錆びた剣が、小さな赤い鳥の止まり木になればいい。微かな雨に打たれる鳥籠の中で、優しい夢を見続けるには丁度いい。

燕雨がこれから、どうするつもりなのか。それはあえて、きかないでおくことにした。失われた浪人の憑依も、燕雨が望めばドラムを打ってくれるだけの助け人になった。それはまるで、「声」を出した彼を浪人が巢立たせてくれたようで。浪人にはそれが、「いい日」だったとばかりに。

ドラムと歌い手の両方をこなす、無茶な舞台で彼は歌った。蒼い霧のような脚光を浴びて。

——時にヒトは、誰かを失う。そして大切なものに出会う。

今のところ、燕雨が歌うものは即興でその場限りだ。欄と蒼潤が温めてきた曲に、誰かの想いで詠<sup>うた</sup>をつける。

——何度も何度も、繰り返すんだ。何度も、何度も……。

だからそれが、きっといつかの誕生日への遅い答。

一瞬の輝きの中で届き、雨に消える声はもう駆け出したから。

「鶇。……ぎゅっとして」

すっかり我が俥になった燕雨が、起き上がって言ったので、油断したら押し倒された。鍵をかけたっけ、と心配になった。

了

オマケ



– epilogue – Passer For Me.

古代の飛空艇「天龍」が、「彼」は嫌いだ。彼の双子の忘れ形見で、そして更には、彼を知る黒い娘がいるからだった。

「……何だ、『白鍵』<sup>はっけん</sup>まで使ったのね。久しぶりね……烙鍍<sup>らくと</sup>」

もうこの世にはいないはずの、蒼い目の男の名前を呼ぶ声。

今の彼は「燕雨」とわかっているのに、燕雨の目の蒼に彼が宿ることを望む娘は、いつまでも「烙鍍」の彼を消さない。

「その名で呼ぶな、って。最初からずっと言ってるのに」

燕雨の前身、時雨は三年前に、彼をかばって剣を折られた。本来彼が守るべきだった時雨を、彼の命と引き換えに、弟子だった翼の悪魔に助けさせた。

元々瀕死な彼は何でも道具屋だったので、時雨の剣も最後の力で直しておいた。

「山科鶴を、迎えに来たの？ わたしは時雨を落ち着かせてくるから、ゆっくりしていけば」

のんびりと言う、彼の想いを知るはずの娘に舌打ちする。

今、彼は「燕雨」であるから、混沌の水沼に棲む夜の娘——橘桃花に触れることは、もう二度とできない。

「……いったいどこまで、あんたが仕組んだんだ？」

時雨の大切だった相手を、神域である「天龍」に攫われた緊急時のため、彼は燕雨の手助けをせざるを得ない。燕雨に渡している酒筒には、彼の灰が混じった火酒を詰めてある。

燕雨が「天龍」に来れるようにした。それだけでも桃花が、この事態を導いたといっても、過言ではない。

燕雨は今、自分が烙鍍として喋っていることを知らない。これは神域だから重なり映る「烙人<sup>らくと</sup>」の意味で、桃花の声も燕雨には、猫羽が喋ったように聴こえているはずだった。

亡霊のような少年と激しく戦い、現在満身創痍の燕雨は、下手をしたらあっさりと消える。元来強い意志の乏しい雨の化生に、烙人は灰という形で意識を支える補助を体内からしている。

たとえそれも、猫羽が管理する灰の火酒の、最後の一滴が無くなるまでのものであっても。

「貴男のせいで、彼、随分素直になっちゃってる。山科鶴を口説きに行けるなんて、紫雨でも無理だったでしょ」

「あんたがそれを言うなよ。燕雨には散々肩入れしておいて」

神域の「天龍」に、燕雨を呼んでまで警告をした桃花は、烙人をかばった燕雨相手でこそだ。「烙鍔」も結局は、燕雨の片隅を借りて、自らの意志など実際は持たない。この黒い娘との逢瀬は、勘の良い燕雨が無意識に、桃花のために烙人の憑依を演出している、これもまた「有り得ない夢」だった。

「白鍵」は、燕雨が烙鍔として力を使う時の戦闘様式だ。憑依とほぼ同義であるため、船室で眠る鶴に近付いた時には、烙人の人恋しさが遷った燕雨を最大の試練が襲った。

「.....何で、肌襦袢、一枚？」

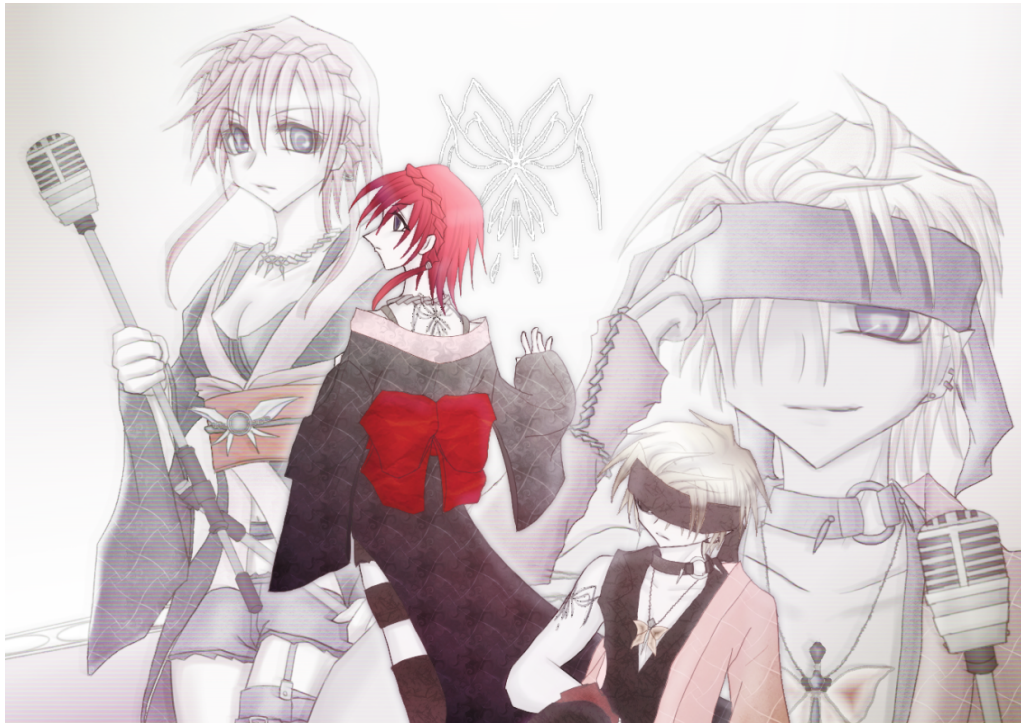
攫われた鶴が、心だけで本当に良かった。

「天龍」から鶴を連れ出せるまで、彼の酷い動悸を、黒い娘以外は誰も知らない。

Many thanks for your visit.

since:2016.12

finished:2022.12.1



Twitter : 滓 (sai)@kazari\_sou



---

雀の涙

---

著     pierrette\*\*

制 作   Puboo  
発行所   デザインエッグ株式会社

---